地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA

S4
2021年

特集●持続可能な未来へ
耕そう！ふるさとの森と大地

持続可能な未来へ
耕そう！ふるさとの森と大地
●特集企画に寄せて

▲北海道えりも町／緑で覆われたえりも岬

▲岐阜県揖斐川町谷汲／「風の谷・森林の楽校」を開催するラーニングアーバー横蔵

▲山梨県山梨市牧丘／「田畑の楽校」の参加者を受け入れるぶどう農家の澤登さん

▲岩手県山田町／そば刈りに集まった「ごっとん会」のメンバーたち

▲広島県庄原市三日市町／「森の楽校」に参加して草刈りをする親子たち

▲岩手県大槌町吉里吉里／「薪まつり」で薪割りを体験する

▲大分県宇佐市／両合地区の「のろよこい」に集まった住民たち

▲徳島県にし阿波地区／レストラン「風和里」

▲愛知県豊田市敷島／古民家を企業がオフィスに活用

▲東京都檜原村・あきる野市養沢／東京の森を保全する「そらあけの会」

近年は、各地で経験したことのないような大規模な風水害や土砂崩れ等で住居や農林漁業に大きな被害が出ています。人口減少や住民の高齢化等による休耕地の増加、森林の荒廃なども災害を拡大させる一因になっているのかもしれません。

各地域では住民の協働作業に力を入れていますが、山間地域では人手不足が深刻です。

そのために森林や里山、農業の保全には、田畑の草刈りや山の手入れ、農産物の収穫などを手伝ってくれる助っ人や支援団体等がどうしても必要です。そんな地域に向けて、学生や企業の若者たちを派遣する団体やNPOが、定期的に各地へ出かけて農林業を支援しています。

さらに各地域でも、集落以外の住民や都市の人に呼びかけて農業体験会や交流会を開催するなど「関係人口」、「交流人口」の確保に積極的に取り組み始めています。

今回は、森や里山、地域農業をどのように保全、維持していくかについて、各地の取組を取材しました。新型コロナウイルスの影響で予定していたイベントが中止になるなど全国的に多大な影響がありました。

一方で、コロナの影響で都市から地方へ移住する企業や家族が増えるなど、田舎暮らしが注目されはじめています。新型コロナウイルス感染症が沈静化し、移住・交流などで地域がさらに活性化することを切に願うばかりです。

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

DePOLA（でぽら）

NO.54

●もくじ

特集/持続可能な未来へ―耕そう！ふるさとの森と大地

特集企画に寄せて――2

■森へ里へボランティアが集う

・繕い、育てる 東京の森
［そらあけの会］の21年　東京都檜原村・あきる野市養沢――4

・森や里山好きが集う、学びの杜
［風の谷・森林の楽校］`20秋　岐阜県揖斐川町谷汲――8

・都市と農業をつなぐぶどう畑
［ぶどうの丘 田畑の楽校］　山梨県山梨市牧丘――12

・楽しく学びながら、里山保全活動
［森の楽校］IN 国営備北丘陵公園　広島県庄原市三日市町――14

■風土と食文化を継承する

・山村に生きる人々の知恵を継承する
にし阿波［傾斜地農耕システム］
徳島県美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町――18

・クヌギ林とため池、棚田を保全する
［両合棚田を守る会］　大分県宇佐市――22

・ほっこりのどかなそばの里
遊休地でそば栽培［ごっとん会］
岩手県山田町――26

■郷土を未来へつなげる地域活動

・北の森よ育て、北の海よ育て
浜の母さんたちの［お魚殖やす植樹運動］――29

・「復活の薪」で森と地域に“暖”を
NPO法人［吉里吉里国］　岩手県大槌町吉里吉里――32

・空き家の活用と自然で魅力発信
［しきしま・ときめきプラン］　愛知県豊田市敷島――35

■INFORMATION　38

●令和2年度 過疎地域自立活性化優良事例表彰　連盟会長賞受賞団体
・豊かな暮らしの創出に向けて（福島県石川町）
・スマホの配車アプリで「支えあい交通」（京都府京丹後市）
・「地域と畑は自分たちで守る」農家ハンター★プロジェクト（熊本県宇城市）
・地域の交流と発見に、美里フットパス（熊本県美里町）

●国内の世界農業遺産認定地域

奥付

「DePOLA」Back Number ／動画で観る過疎地域

「でぽら」とは――

Depopulated Local Authorities（人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体）からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいますが、国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市部が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」（でぽら）を発行しています。

●表紙写真

上/「風の谷・森林の楽校」で、次回より本格的に間伐作業する森を見学する参加者たち
左中/そば刈り作業をする」「ごっとん会」の人たち
左下/斜面が多い西阿波地区、斜面に適した農具の製造と修理をする野鍛冶職人・大森さん
右/里山や森で自ら遊びや道具作りに挑む「ガキ大将講座」の青少年たち。右は主宰の安藤さん

森へ里へ
ボランティアが集う

繕い、育てる 東京の森

「そらあけの会」の21年

●東京都檜原村・あきる野市養沢

「私はただのオバサンだった」開口一番そんな言葉を口にする72歳女性。「会社の仕事は正解だったのか」自問を続ける73歳男性。

森林ボランティア集団「そらあけの会」は、発足21年。ユニークな個性と気骨のある面々が、林業家のもとに集まり、10年、20年という年月を森づくりに注いできた。共に年齢を重ね、60代、70代となった今も、ナタを持ち、鋸を抱え、山に向かう。東京の西に広がる広大な山林。そこが彼らの活動拠点だ。

▲山の中では力を省力化するため、真横か上位置に向けて倒す。ナタで切れ目を入れる角度の見極めが大事
▶右上／間伐作業に欠かせないロープワークを習う。もやい結びは多くの場面で活用される
右下／伐採を林業のプロたちは「木を寝かせる」という。長年育てた木への想いが伝わる

◀上／朝礼でその日の作業の段取りと、担当を確認し合う
下／作業小屋から道を渡って山の現場へ
▼それぞれの作業用道具を手にし、池谷家脇の水路に沿って、山へ向かう。水路のワサビが水の中で光る

8600人が所有する西多摩の民有林

総面積の約3割が森林という東京。その森のほとんどが集中する東京西部。特に西多摩地域には、登山や川遊びなど都民に親しまれた観光地としての顔の他、広大な山林を守り、育てるという役割がある。

西多摩地域44000haに及ぶ山林は、すべてが民有林で、所有者の数は約8600人。そのうち1ha未満の所有者は約5000人と圧倒的に多く、小さな区画に険しい地形が続くため、作業用の林道が造りづらく、林業にとっては苦労の多い山域だといわれている。

そこに山林所有者の高齢化と後継者不足が重なり、あちこちの山に放置林が増えるばかりとなった。

その放置された森を何とかしたい。山国日本の、そして東京の貴重な森。平成9年には特定非営利活動法人日本森林ボランティア協会が設立されて、森林ボランティアグループが各地に生まれた。

「そらあけの会」は、東京西部檜原村からあきる野市養沢へと広がる池谷林業の山林を拠点に活動を始めた。

江戸期から続く池谷林業は、現オーナーの池谷キワ子さん(82)が5代目を務める歴史ある専業林家だ。父池谷秀夫さんから受け継ぎ、キワ子さんが育林管理する186haの山は、養沢川の美しい流れを挟んで東西に広がる。

戦後の拡大造林で人工林が急増した多摩の山林は、繁栄を誇った時代が過ぎ、外国材の輸入が進むと、山には人の手が入らず、みるみるうちに荒れていった。

山を育て、山の恵みを受けながら、集落の人々と共に生きてきた池谷家の歴史は、林業の栄枯盛衰の中で、木を植え、山を慈しみ続けてきた人々の歴史でもあった。

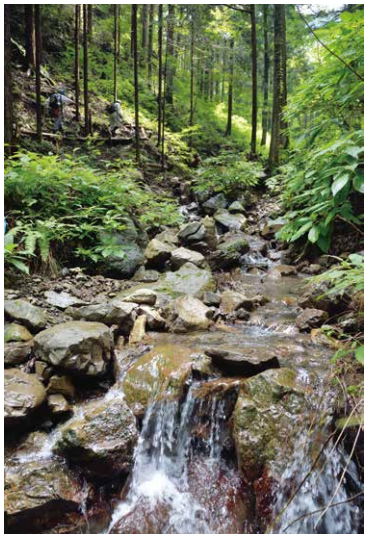
初めて目にした惨状 女性たちが林業を学ぶ

平成10年には西多摩地域に大雪が降り、その想像を絶する破壊力は、長年手をかけてきたスギやヒノキの森を一変させた。

「そらあけの会」第一号メンバーとなる岡根陽子さんは当時50歳で、友人と環境問題を勉強中。誘われた現地見学会で初めてこの惨状を目にし、林業の現実を知ったという。

「これがすべての始まりだった」と岡根さん。

この翌年、岡根さんは友人と森林ボランティア「そらあけの会」を立ちあげた。



▲視察に訪れた林野庁長官も一目惚れしたという美しいワサビ田だった清流。令和元年秋の暴風雨でガレ場に

父の没後、ひとり残ったベテラン作業員故小沢勇次さんこと、〝ユウさん〟と山に入り、山仕事に明け暮れるキワ子さんの前に、作業を手伝いたいというボランティアが出現した。その申し出はどんなに心強かったことだろう。

学業、結婚、子育てと続いた都会での暮らしから、一転して専業林家のオーナーへ。信頼できるユウさんがいたからこその一歩だったが、作業の手が増えることの有難さはいうまでもない筈だった。

「そらあけの会」はキワ子さん、ユウさんの

①　檜原村から続く所有林に立つキワ子さん。昔はこの辺りに作業員の宿泊小屋があったという
②　苔に覆われた沢は格別の美しさ
③　久々の作業林をこれから歩くメンバーたち。足元の悪い沢沿いの道を、確実な足取りで登る
④　かつてユウさんの住まいだった家を、メンバーの一人が購入。交流拠点として活用されている

もと、森林作業を一から学び始めた。雨の日には小屋での勉強会、道具の手入れと、毎月2回、休むことなく続けられた。

岡根さんは取材の日、開口一番「私はただのオバサンだった」と言ったその人だ。72歳になった今でも、4mもあるスギの木に野生動物さながらの軽やかさでスイスイ登り、枝打ち作業を完璧にこなす。

女性が中心となって動き始めた「そらあけの会」メンバーは、その後二人、三人と増え続け、やがて共感をもった男性メンバーも加わり、現在は総勢20名程。代表を務めてきた岡根さんは家族の介護のため一線を退き、今は応援支援隊として皆を見守り支えている。

その後は同じ年に入会した赤瀬しづかさんが代表を引き継ぐ。

ナタで枝打ちする女性たち

取材に訪れた日、「そらあけの会」の作業現場は、池谷家屋敷の裏手に延びる沢沿いの山林だった。急な道を登っていくと、谷風が吹きわたり何とも心地良い。

ご先祖の治郎平翁が植えたという樹齢150年のヒノキが、池谷家のシンボルのようにそびえ立ち、われわれを迎える。

枝打ちされ真っすぐに伸びたスギとヒノキの森は、独特の清々しさと静けさが広がり、思わず深呼吸をしたくなる。

間伐作業のこの日、樹齢32年のヒノキが大地を叩きつけるような音をたて、森の中に倒れていくのを見た。

ロープとナタと鋸を使ってこの木を倒したのは、森林インストラクターの資格をもつ日比典子さん(65)。そして75歳の蔵野妙子さんと、若手の55歳茶園詠子さんがサポートした。

指導したのは今日のリーダー79歳の伊藤彰功さんだ。伊藤さんは別の森林ボランティアの仲間から、「ナタで枝打ちしている女性グループがある」と聞き、それが入会の動機となった。

今どき、ナタを使っての枝打ちは余程の技量がない限り難しく、ナタの重さだけでも敬遠される作業なのだという。

伝統的な山仕事の技術を学びたいという「そらあけの会」の、ただならぬ本気度が伝わってくる話だった。

それを支えるベテラン仕事師ユウさんと、長年育ててきた大切な樹を、傷つけるかも知れない自分たちに、ナタを使わせてくれたキワ子さんの気持ちの大きさに、メンバーたちは感謝を忘れない。

赤瀬しづかさんはそのことを、しみじみと語る。(注・最近は枝打ち鋸も使う)

ケガと弁当は自分持ち

誰ともなく言いだし、合い言葉のように皆の胸に刻まれている「ケガと弁当は自分持ち」という言葉は、この会の自主性をよく現わしている。

毎回作業の終りには「ヒヤリ、ハッと」という、その日危ないと思った体験を、どんな小さなことでも報告し合い共有する鉄則がある。ボランティアといえども、道具を使っての斜面での作業は、危険とは常に隣合せだ。慣れや油断は許されない。

作業の指示は山主であるキワ子さんの意向に沿って決められ、山づくりのプロ中のプロ、

▼名瀑と呼びたいこの沢の名所、大滝。水の勢いと姿に見とれる。手前には小滝もある

ユウさんといえども、キワ子さんの指示には従う決まりだ。

こうしたしっかりとしたルールの中で、互いの年齢や力量に応じた作業が、緊張感の中で進められる。82歳になるキワ子さんも、現役で頑張る。

そして、昼休みには思いきり開放的な時間が待っていた。丸太を組んで皆で作った休み処。その中央には焚火がたかれ、大きな鍋に山の恵みや持ち寄った野菜などをたっぷり入れた特製みそ汁が作られる。

お菓子作りの先生千葉正子さん(73)が腕を振るい、それぞれ持参したおにぎりを食べながらの、至福の時間。

「子供たちにこうした山の素晴しさを伝えたかった」と、子どもエコクラブのリーダーだった戸井田久美子さん(68)が笑顔を見せる。

都心部の渋谷から通う増田隆さん(79)悠紀子さん(76)夫妻。妻の悠紀子さんは間伐、枝打ちそれぞれの作業の楽しさを語りながら、地味な下刈りの大切さも指摘。こういう仕事に決して手をぬかないメンバーたちなのだと、力を込める。

入会17年目の岡田誠さん(75)は、林業の衰退は国産資源の有効活用や治山治水を疎かにし、地球温暖化を加速させていると、熱い発言。

退職後、旧中山道を東京から京都まで一人歩いて旅した市川孝美さん(74)は、全国各地で見た放置林の多さに、政治の無策をつくづく感じたという。

開かれた森へ

50年余り育てたスギの相場が1本1000円にもならないという現実。養沢辺りでは70年という年月を商品化までにかけるが、これでは搬出の手間賃だけで売上げが消えてしまうと、オーナーの池谷キワ子さんは嘆く。

林野庁は山の所有者同士協力し合い、林道を整備し、搬出コストを下げる集約施業を勧めるが、実際には所有者の事情もさまざまで難しい。

しかし養沢地区には、森林ボランティアから「認定林業事業体」として、林業を請け負う作業のプロが誕生している。これにより放置林は改善され、山は本来の健康な姿を取り戻しつつある。

また池谷林業の所有林の広がる檜原村でも、林業の歴史は古く、大規模林業が続けられてきた。先行きの厳しい林業ではあるが、一方で自然との共生への理解から、若者の参入や都心大手企業の作業支援など新しい動きも見られるようになった。

村ではエコツーリズム事業の一環として、樹木の搬出や建築材、木質バイオマスの利用につなげようと、林道の開設に力を入れ始めた。

森が人々に開かれていく。生産性だけではない、森と人と生きものたちとの豊かな関係が、東京の森に広がっていく日が、きっとやってくることだろう。

「そらあけの会」スタートの頃には、「どんな枝打ちをされるか分かったもんじゃない。ヘタにやられちゃあ、木が台無しだわぁ」と、ボランティア受け入れを渋っていたユウさんだったが、熱心で丁寧で、怖がらないメンバーたち（キワ子さん談）に、ユウさんの心はほどけていった。

ちなみに〝そらあけ〟とは、間伐や枝打ちの後、頭上に空が広がり、森が一気に明るくなる、その喜びの瞬間を、名付けたのだという。「そらあけの会」の素敵なメンバーたちが、今日も楽しくコツコツと、森を繕っている。

参考文献・池谷キワ子著「山からのたより」

文／片桐淑子　写真／小林恵

▲「そらあけの会」の作業小屋。周囲の棚には使い込んだ道具が整然と並ぶ
◀上／メンバーたちのヘルメット。会の歴史を感じながらも、すべて手入れが行き届いている
下／下刈に使う大鎌。間近に見ると刃物の迫力に緊張する

●「そらあけの会」は現在、新規メンバーの募集は行っていません

森や里山好きが集う、学びの杜

［風の谷・森林の楽校］'20秋

●岐阜県揖斐川町谷汲

森へ里へ ボランティアが集う

▶ギフチョウ保護地区と看板のある公有林

NPO法人「JUON NETWORK」（樹恩ネットワーク）主催の「森林の楽校」「田畑の楽校」は新型コロナウイルスの影響で、軒並み中止や延期になったが、揖斐川町ラーニングアーバー横蔵の「風の谷・森林の楽校」だけは、年4回予定通り「森林の楽校」を開催している。小林正美館長と林業指導者の強い意志によるもので、6月に続いて2回目となる学校が9月5・6日に開催された。強大な台風10号が九州に上陸しようとしている時であったため、森林での作業は1日だけに短縮されて行われた。

▲ラーニングアーバー横蔵の建物。廃校16年となったが木々が茂る緑のオアシスだ

▲校庭に出来た木学館やそば道場

▲「森林の楽校」開校式、スケジュール説明後に簡単な自己紹介

やさしい風が吹く里山

揖斐川町は岐阜県の最西部にあり、北は福井県、南は滋賀県に接し、南東部から北部は標高1000mから1300mの山々がそびえ、町の中央部を揖斐川が流れている。揖斐川には日本最大貯水量を誇る徳山ダムをはじめ4つのダムがあり、総面積803・4㎢のうち91・1%が森林。地理的な面から、関西圏住民との交流が多いのが特徴といえる。

「森林の楽校」が開催されるラーニングアーバー横蔵のある谷汲地区は、町の北部に位置し、揖斐川の支流根尾川に沿って田畑が広がっている。丘陵地には茶畑が栽培され、「谷汲茶」として人気がある。水汲山華厳寺、両界山横蔵寺等の由緒ある寺院や、桜の名所・根尾の淡墨桜、山奥には伝説の夜叉ケ池等の名勝地が点在している。三方を穏やかな山々に囲まれた盆地であるが、太平洋の伊勢湾から日本海の若狭湾へ抜ける風の通り道に当たるという。「やさしい風が吹くんです。『風の谷・森林の楽校』はそんな意味を込めて命名しました」とラーニングアーバー横蔵を運営し、「森林の楽校」長を務める小林正美さん（71）は言う。

ラーニングアーバー横蔵（「学びの杜」の意味）は、平成16年に廃校となった旧谷汲横蔵小学校を改装して研修・宿泊施設に再生したもの。東京からJターンしてきた小林さんが館長になって、小中学生の生活体験・野外

学習会、大学生のゼミ、各種の講演会や懇親会等を実施し、運営には小林さんが代表を務める「有限会社樹庵」が当たっている。

小林さんは近在の久瀬地区の出身で、早稲田大学を卒業後、大学生協本部（東京杉並区）に勤め、学生や都市住民が地方と積極的に交流して森や里山の再生を支援する活動が必要と、ＮＰＯ法人「JUON NETWORK」を立ち上げ、「森林の楽校」「田畑の学校」をスタートさせた。同連合会の専務理事だった54歳の小林さんが、なぜすべての役職を辞し、家族と別居してまで廃校の再生に取り組んだのか。そこには、地域の灯を決して消してはいけない、昔の「ガキ大将」として子供や若者たちに生きる力となる大切なものを伝える場にしたいという強い意志があった。

平成17年から開校した「森林の楽校」は、今までに延べ１５００人が受講、森林作業に参加してきている。

森林での学習の場を提供してくれた地元横蔵財産区管理会の公有林は、管理会のメンバーと受講者が年４回実施する森林作業で、ほぼ予定地の手入れが完了するまでになった。そのため、令和２年６月に横蔵森林関係者と最後の作業を実施し、これからは民有林の間伐作業を行っていくことになった。

山仕事をする民有林へ下見に

残暑が続き30度を超える日の昼時だが、ラーニングアーバー横蔵の玄関まわりには、木製の机やベンチ等が配され、木々や山野草が緑濃く茂っていて、そよ風が心地いい。

午後１時、今年２回目となる「森林の楽校」の受講者たちが玄関脇の教室に集合した。参加者は台風の影響もあって数人減り、森林指導者を入れて８名となった。

小林さんが「２日間の予定ですが、強力な台風が来ているので、山へ入っての作業は本日のみ、明日は自由行動にします」と挨拶をした。続いて森林指導者の湯浅明さん(65)が、「今日から民有林の森林作業になります。そのため、どんな山林かを皆さんと現地へ訪ねるのが今日の予定です」と説明。その民有林の所有者加納武人さんの娘・加納舞子さん(35)が立ち上がり、「町の森林組合に勤めていますが、山へ入ることはほとんどなく、山仕事は一度も経験ありません。よろしく指導してください」と深く頭を下げた。

早速、車数台に分乗、軽トラを運転する湯浅明さんの誘導で山林へ向かった。約10分で山林入口の広場に到着。車から降りたメンバーたちは、さっそく慣れた様子で森への道を歩きだした。３年前に転倒して入院、リハビリを続けて来たという小林さんも「今日は新しい作業林を見ておきたい」と、湯浅さんについて気丈に歩き始めた。

▲道路脇の草刈りをしながら歩く参加者たち
▼次回より間伐や枝打ちをする予定の林を下見

参加したのは、男性が木村吉宏さん(60)と西川元晴さん(30)。中日新聞養老通信局の男性も取材のために参加している。木村さんは埼玉県上尾市在住だが、実家が揖斐川にあり母親が一人暮らしをしているため、現在は月の半分をここで暮らし、森林の楽校にも何回か参加しているという。西川さんは京都府和束町の雇用促進協議会に所属しながら各地の地域おこし活動や森林作業に携わってきており、本誌(51号)で取材した奈良県で大和茶を栽培をする伊川健一さんとは親しいと言う。機会あるごとにラーニングアーバー横蔵を訪れており、今日も宿泊する予定だった。

女性は、ご主人の仕事の関係で京都から大垣市に移住、夫婦で農業に取り組み田んぼも１反７畝耕作しているという谷口孝子さんと、揖斐川町池田地区から２度目の参加という堀真由美さん。岐阜県の会社をリタイアして池田に家を借りており、「揖斐川の自然と人が好きで、各地を歩き回っています。11月には町主催の『街道を歩く会』のガイドもします」

▲伐採したケヤキを細かく切断。右／倒す方向を決めてロープを張る西川さん
◀作業を終えて全員集合。左端が小林さん

ケヤキに刻まれた40年間の歴史跡▼

と堀さんは言う。

森のオーナー加納舞子さんは、森林作業は初めてということで、湯浅指導員から「はい、舞子ちゃん、これを手伝って」と、ことあるごとに言われている。季節の果実や野菜でスイーツを制作販売したり、若い女性が和服を着て華厳寺参道を歩く企画を実施するなど、地域おこし活動で頑張っている町の人気者。後で自宅へ寄らせてもらうことにした。

周辺は横蔵の公有林で、手入れされたスギとヒノキが立つ。林道は小石が敷き詰められ、そこに草が生えてクッションの役割をしているので歩きやすいが、周りには夏草が生い茂っている。参加者はそれを刈り取ったり植物の名前を確かめたりしながら楽しそう。

間もなく広々した空間の中に、「ギフチョウの自生地、自然環境保護地区」と書かれた看板が立っていたが、すでに朽ちかけている。

「昔はこのあたりにも生息していたんだが、今は見かけない」と木村さん。ギフチョウは黄白色に黒の縞模様の入った3～4㎝のアゲハ蝶で、4月頃飛んできてカタクリやスミレの花を吸蜜するが、山が手入れされなくなったり、採取する人もいて、その美しく乱舞する姿を見る機会がほとんどなくなったようだ。

やがて脇道へ入って、斜面を約20分ほど登ると加納家のスギ林へ到着した。ほどほどに手入れされている森だが、間伐を待つ木が沢山あり、奥の方は日当たりが悪いせいか暗い。

「次回11月の教室から間伐や枝打ちを始めます」と湯浅さんが説明、それを皆で確認する。下山して公有林の平地へ戻ったところで、大木の楠に寄り添うように痩せて育つケヤキを1本間伐することになった。湯浅さんと西川さんが幹にロープをかけて、倒木する方法を確認したあと、鋸を持った女性たちが木の根元に刃を入れ始める。

「この楽校での作業では、鎌や鋸だけ使用する〝てのこ〟が原則です。チェーンソーは専門家が間伐した木を切断するために使うことはありますが、慣れないと危険な場合が多いんです」と見学していた小林さんが言う。

間もなくケヤキは切断され、音を立てながら広いスペースに横になった。切断されたケヤキの断面を見ると、木の年輪が混み入っている時代が10年ほどある。その時期は周りに木が密集していて成長できなかったのだろう。植物たちはその場所で生きるしかないが、どんな環境でも必死に生きようとしている。だからどんな木でも伐採したら活用してあげるべきだと感じた。舞子さんは西川さんから教えられて木の皮をむきだした。美しい木肌が出てきて、それをハンガーや飾りものに使えることを学び感動していた。切断して一カ所にまとめた木は、明日湯浅さんが引き取りに来るという。山の作業は最後の片付けまですることでやっと終了するのだ。

作業は午後4時に終了、これから「樹庵」に戻ってシャワーや入浴をして、6時から夕食を取りながら懇親会をする。

我々は華厳寺の門前にある宿を取ったが、桜並木が続く参道には観光客の姿はなく、コロナの影響をひしひしと感じた。

空き家を改装して、交流の場に

森林作業の後、道筋にある加納舞子さんの家に寄らせていただいた。手入れされた庭木の中に本格的な木造住宅が建ち、脇に建つ離れの一室が舞子さんの工房になっている。祖母が暮らしていたという離れの厨房を改築した部屋で、大きな冷蔵庫と作業台が置かれている。ちょうど父親の武人さんが栗を採って帰宅した。スイーツを作るのが趣味の舞子さんは、父親が持参してきた栗を秋一番のケーキに活用するという。スマートフォンの中には沢山の作品が収められており、イベントでは舞子さんのスイーツを待ち望む人が多いようだ。

次に向かったのは森林作業の指導に当たる湯浅明さんが住む借家。湯浅さんは三重県四日市に自宅があり、四日市ではグリーンボランティアとして「森林づくり三重」のリーダーだが、今は揖斐川町北方の民家に住んで、

◀採れたての栗を持って、加納さん親子
▼舞子さんが作るスイーツの一例

家の改装を続けている。

揖斐川の河川敷に近い場所に十数軒の洒落た民家が立ち並んでいるが、空き家が多くなり、湯浅さんも民家を1軒借りている。2階建て住宅だが、広い庭と納屋が2つあり、湯浅さんはその納屋の1軒を改装中だった。玄関を入った土間には手づくりの囲炉裏と椅子が設置されていて、木のいい香りにあふれている。「時々仲間が集まって、ここで炭火焼きを楽しむんです」と言う。

土間を上がると右手には10畳ほどある居間。床をフローリングにした明るいオフィス風な仕上がり。医療器具もあるため聞いてみると「娘が四日市で整体師をやっているのですが、この町にも整体やリハビリをしたい人が増えているため、これからは定期的に来町し開業する予定です。体調を整えながら、お喋りや食事を楽しめる場所にしたいと思います」と語る。

この家を一緒に見学した舞子さんも「すごくいい、私も協力して、菓子など作って持参します」「若い人が出入りしてくれると嬉しいねえ」と二人の会話がはずむ。

▲湯浅さんが改装した厨房と整体ルーム

ふたりは地域を担うリーダーで夢紡ぎ人、小林館長と共に街に新しい風を吹かせてくれそうだ。

廃校は未来を託した「楽校」

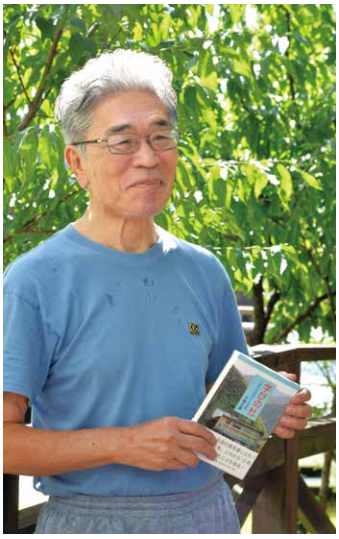
ラーニングアーバー横蔵の校庭には木工作りをする木学館、手打ちそば道場、バーベキューを楽しめる野外レストランがある。

2階建校舎は、職員室がお洒落なレストランに、教室は区分けしてピアニカ、ハーモニカ、クレヨン等の名前がついた宿泊施設に、理科室は広い浴室に変貌。体育館は整備されてスポーツを満喫できる場になり、校庭には地域の高齢者用のマレットゴルフ場もある。

地元の人や小学校のOBでさえ「森の中に明々と灯がともり子供の声が絶えない」と驚嘆したラーニングアーバー横蔵。年間2万5000人が利用し、7割が小中学生だという。一般人のリピーターも多く、笑顔で対応してくれる小林さんと仲間たちの姿を見たいからだと言う。

翌日、ラーニングアーバー横蔵を訪ねると、小林さんの所には地元の若者が数人訪ねて来ていた。校庭には甥っ子を乗せた舞子さんの車もやってきた。「姉の子供で、これから町のイベントに連れていくの」と、今日はしとやかないでたち。ちなみに、舞子さんは未婚。農林業に関心があり揖斐川へ来てくれるステキな男性を募集中である。

地元の住民から何かと頼りにされている小林さんだが、昨日の山歩きがハードだったせいか、少し疲れた様子。「今年は信じられないほど暇です。例年なら夏休みは合宿や研修に来る青少年で大忙しですが、今年はコロナで93%がキャンセルになりました。私も東京へ帰ることが出来ないでいます。もっとも例年でも年3回帰京する程度ですがね」と苦笑する。



▲「学びの杜」を手に語る小林さん

小林さんはラーニングアーバー横蔵を設立して10周年の時、「学びの杜～廃校は地域の文化遺産～」という本を出版した（発行／夢工房）。住民や宿泊者、地域問題に関わる人等が多数寄稿している本で参考になる図書だ。3年間で赤字を解消して事業を軌道に乗せたというが、その苦労については記していない。常に未来に向けて行動実践してきたからだろう。同書のラストには「核家族化と分散型社会は実に早いペースで進んでおり、中山間地は限界から消滅の集落になりかねない。だから何かの縁で知り合った者同士が助け合っていく、新しい縁社会にしていくことが必要だ」と書いている。コロナ新時代とも共通しており、久しぶりに全身に緑風を浴びた取材であった。

文／浅井登美子　写真／小林恵

●ラーニングアーバー横蔵「樹庵」　☎0585-55-2246　http://www.juann.jp
●JUON NETWORK事務局　☎03-5307-1102　http://juon.or.jp

▶収穫期を迎えたぶどうがたわわに実る澤登農園で作業する参加者たち

森へ里へ
ボランティアが集う

都市と農業をつなぐぶどう畑
［ぶどうの丘 田畑の楽校］

●山梨県山梨市牧丘

都市と農業を結ぶ取り組みとして、注目を集める援農イベント、「ぶどうの丘 田畑の楽校」。一日限りのボランティアではなく、年間を通して作業に携わり、共に学びあい、信頼関係を築いた地域がある。ぶどうがたわわに実る秋の甲州を取材した。

援農イベントが交流のきっかけに

土曜午前、山梨県山梨市牧丘にある収穫間近のぶどう畑に、援農ボランティアの人々が集う。中心で注意事項などを説明するのは、ボランティアを受け入れる澤登農園の主、澤登一治さん(77)。話が終わると、15名のボランティアは畑に散り、手早く作業を始めた。表情は真剣そのもの。すぐに人々の額に汗が光る。取材日はあいにくの曇天。そこかしこで秋の虫が鳴いていた。

ボランティア活動を主催しているのは、認定NPO法人「JUON NETWORK」(樹恩ネットワーク)。今回行われた「ぶどうの丘 田畑の楽校」は、農家の方の力になりたい都市住民と人手不足の農家を結ぶため平成18年に始まった取り組みだ。

事務局が主催する田畑の楽校イベントは、各1泊2日の日程で年7回。年間を通じてぶどう作りに必要な農作業を身につけながら、農家の人たちとの交流を深めている。しかし、農繁期に1カ月に1回程度のボランティアでは十分に作業を覚えられず、畑を守る戦力にはなりづらいのが実情。そこで、イベント日のほかも有志が誘い合い、月に何度か援農作業に通っているという。

しかし、今年は事情が違う。新型コロナウイルス感染症の影響で、9月まで6回のイベント活動のほとんどが中止に。秋になり、万全の対策を施し日帰り開催にこぎつけた。

ベテランが初心者をフォロー

この日の活動はぶどうの「粒抜き(摘粒)」。5人1組のチームになり、ぶどうにかかっている袋を破り取る係、生育不良や病気の粒をはさみで切り取る係、ぶどうの房にカサをかけていく係と手分けして作業を進める。「終わったあとの房を全方向から見てチェックして」「端からやっていかないとどの房をやったか分からなくなるよ」。ベテランボランティアが細やかに声をかけ、初心者をフォローする。スピードアップを図り効率と正確性を追求するその立ち居振る舞いは、畑を完全に「自分ごと」として理解している自信と誇りが感

▶15年間ボランティアを受け入れてきた澤登さん。主に巨峰を栽培する園芸家である

▶JUON NETWORK
職員の兵頭さん

じられるものだった。

「牧丘の田畑の楽校の素晴らしい点は、職員がいなくても一般ボランティアの主導でプログラムが進む熱心さです」と話すのは、JUON職員の兵頭英理子さん。参加歴の長いボランティアがリーダーとなり、他の参加者に惜しみなく技術を教える、メーリングリストで連絡をとりあい、有志が月1回以上は畑に関わる、など熱心な活動が長く続く秘訣を教えてくれた。共にスキルが上がり、実際にぶどうに触れての粒抜きや袋かけなど、ぶどう作り一連の作業に携ることができる。それがモチベーションとなり、また新しい試みが生まれるなど、好循環を生み出しているのだ。

兵頭さん自身もボランティア出身。「ずっとボランティア参加者でも良かったけれど、私にもできることがあるのではと思ってJUONの職員になった。私は中から、みんなは外から活動を支えてくれて、とてもうまく回っている好例」と胸を張る。理由を尋ねると「やっぱり澤登さんのキャラクターと寛容さかな」。ボランティア参加者は、「ただいま」と実家に帰ってきたような気持ちで、澤登家の門をくぐるのだという。

自然相手、共に学び合う関係を

これまで約15年間、ボランティアを毎年迎え入れる澤登さん。農業は人手不足とは言え、自分の畑に他人を入れるというのは、覚悟がいるのではないだろうか。以前は、最も多忙な出荷の最盛期にはボランティアを受け入れていなかったという。澤登さんに疑問をぶつけてみた。

「仕事はみな同じ。ぶどう作りも、ボランティアの方の各々の仕事も、仕事に対する心構えや、工夫をこらすという点で同じなんですよ。だから、こちらのぶどう作りを勉強して取り組んでくれたらありがたいし、私たちも勉強させてもらっているんです。共に勉強してやっている」。

ボランティアが少人数のときは、澤登さんの自宅に泊めることもあるという。そんなときは仕事談義に花が咲く。朝の4時まで話し込んだこともあるという。

「交流を深めて、ともに挑戦していくんです。自然相手だから思うようにはいきません。来年はこうしてやろう、ああしてやろうと皆で楽しみ方を見つけながらいくのです」。

ボランティア側もその深い信頼をしっかり受け止めて、誠実に活動している。山口真人さんのボランティア歴は8年、有志活動も含め農繁期は月2回程度ぶどう畑に足を運ぶベテランだ。それでも「ぶどうの房に触るときは緊張します」と話す。「大切な商品ですから、間違ったことをしてはいけない」。

ボランティアを続ける理由を尋ねると、「澤登さんは、耕作放棄地を引き継ぎ、地域のぶどうを守る活動もしている。人柄に触れ、牧丘のぶどうを守りたいという共通認識が芽生えた」と答えてくれた。

ボランティア3年目の松山裕子さんも澤登さんの人柄に惹かれて活動を続けている一人。

「ふだん農業と関わりのない生活を送っているので、農業の大変さややりがいを学んでいる。それに澤登のお父さんの話を聞くのが楽しみで」と話す笑顔に、達成感がにじむのが印象的だった。

JUON、牧丘の澤登家、ボランティア参加者の三者が、それぞれたゆみない努力をし、信頼しあい協力しあって成り立っている「ぶどうの丘　田畑の楽校」。今年は長雨のせいで、例のないほどの不作だというが、澤登さんの顔に不安の色はない。来年はどう取り組もうか、新しいぶどうの試作をどうするか……、信頼関係を背景に努力を楽しむことのできる人たちの姿がそこにはあった。

文／二階堂ねこ　写真／渡邊健太郎・高良真秀

▼「ぶどうの丘 田畑の楽校」に参加したボランティア

●JUON NETWORK事務局　☎03-5307-1102　http://juon.or.jp

楽しく学びながら、里山保全活動

［森の楽校］IN 国営備北丘陵公園●広島県庄原市三日市町

森へ里へ ボランティアが集う

国営備北丘陵公園内に広がる「いこいの森」。その未開発エリアを活用し、地元のボランティアグループが里山保全を目的とした「森の楽校」を開いている。人が足を踏み入れなくなって何年も経ち、草木が生い茂っていた森はどのように変わったのか。整備を通じて人々は何を得たのか。67回目となる「森の楽校」。8月末の日曜日、残暑の庄原市を訪ねた。

▲ツリーテラスで、全員集合

人の暮らしがある森をつくろう

ヒノキやコナラ、クヌギなどの木立に囲まれてツリーハウスが建っている。その横には、10m以上ありそうな長いロープのブランコ。子どもたちがターザンのようにぶら下がって、歓声を上げている。奥には丸太で作ったシーソーや滑り台、ご飯を炊く竈やピザ窯まであり、まるで〝森の中の秘密基地〟といった光景だ。

ここは、中国地方唯一の国営公園「国営備北丘陵公園」。340haもの広大な敷地の一部を活用して、年に10回、里山保全を目的とした「森の楽校」が開催されているのだ。

訪ねたのは8月最後の日曜日。新型コロナウイルス感染症が流行して、4月から7月まで活動を中止したため、久しぶりの開催だった。午前9時、「森の楽校」が開かれる場所に到着すると、すでに十数人のスタッフがテントを張ったり、火を起こしたり、開催に向けて準備を進めていた。

受付で、公園管理センター企画広報課の末長秀紀さん(55)に声を掛け、主催者であるNPO法人「森のバイオマス研究会」理事・八谷恭介さん(50)を紹介してもらった。

八谷さんによると、この場所で「森の楽校」がスタートしたのは平成26年。公園

▲スギ、ヒノキの大木が茂る森の楽校入り口附近

▲樹々を利用して、手作りブランコ

▼日よけ、雨よけ用に大テントを張る

◀「森林の楽校」開校式。スケジュール説明後に簡単な自己紹介

内の「いこいの森」の未開発エリア（閉鎖エリア）を利用して、里山保全の活動ができないかと、末長さんから相談を受けた。

そもそも「里山」とは、人里近くにある、生活に結びついた山や森林のこと。昭和35年頃まで、人々は家庭用エネルギー（薪・木炭など）や食料（山菜・キノコなど）を里山から得ていた。

「昔の人は、生きるために必要なものを得るため森に入っていたんです。しかし今は生活に必要なものを里山から得ていない。必要がないから山に入らず、手入れもしない。里山は暮らしがあるから里山なんです。ここでも畑を作って野菜を育てたり、エネルギーの自給自足を目指せば、里山の荒廃を止められるのではないかと考えたのです」と八谷さん。

地域資源が活用できれば、長距離輸送にエネルギーを使うことがないため、環境保全につながるだろう。今、注目される「SDGs」（持続可能な開発目標）という観点からみても、里山保全には無限の可能性が秘められている。

◀「森のバイオマス研究会」理事の八谷さん（左）。子どもたちに人気のツリーハウスは、西平さんが中心になってつくった（右）

地域の人々が得意分野を持ち寄る

「森の楽校」は年間10回開催しており、今回が67回目となる。スタートしたての頃は参加者が数人ということもあったが、今は毎回50人前後の親子が集まるそうだ。

平成26年にこの場所で「森の楽校」を始めた頃は、ジャングルのように草木が生い茂り、とても人が入れる状態ではなかったという。「数年で、荒地をここまで快適に、多くの人が集い、楽しめる場所にすることができたのは、地域の人々の協力があったからです」と八谷さん。なかでも、強力な助っ人が、三次市で牧場を経営している西平孝治さん（61）だ。彼は、地元の子ども会での活動を通して、ツリーハウスやピザ窯を築いた経験があった。その実績を買って協力を求めたそうだ。

しかし、西平さんいわく、「私は知恵と経験は持っているけど、一人じゃできない。手伝ってくれるスタッフが充実していたからできたんですよ。八谷さんは元大工さんなので木材や建築の知識をもっているんです。ツリーテラスや小屋を建てるときも頼りになりました」

八谷さんと西平さんを中心に、ボランティアスタッフたちは最初にツリーテラスを、次にツリーハウスを作った。その後、小屋を建て、2つの竈、ピザ窯、倉庫などを作り、どんどん設備を充実させていった。

「柱となる木は、ほとんどこの森から伐り出しました。夏に木を伐り倒したら、『森の楽校』に参加した親子に樹木の皮をむいてもらうんです。これは子どもでもできる安全な作業ですから。その後、秋まで乾燥させて冬場にカットするんです」

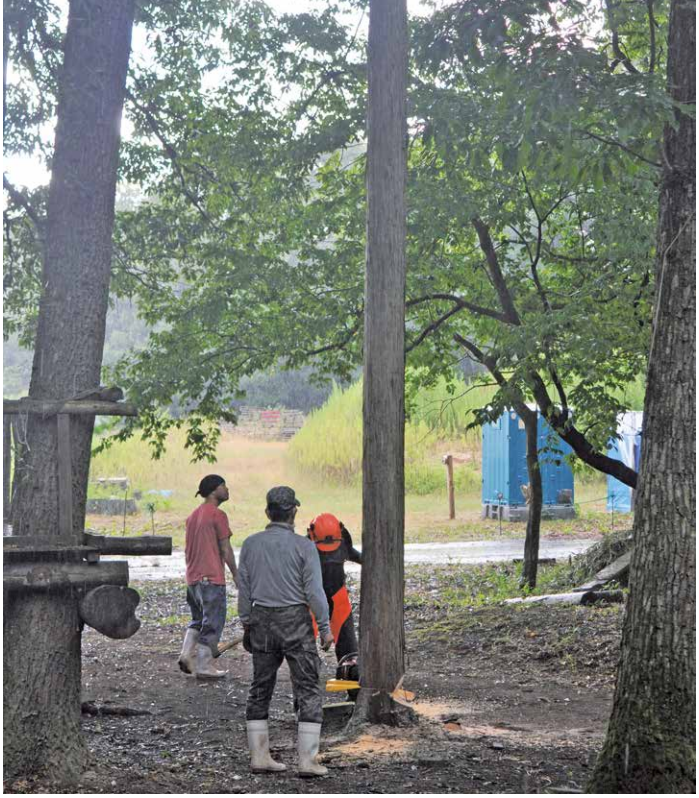
「森の楽校」の活動を上手に組み込んで、多くの人の協力を得ながら里山保全を行ってきたのだという。

午前10時、参加者47人が集合した。キャンプファイヤーのように中央の焚き火を囲んで、全員が順番に自己紹介する。

話の内容から、虫に詳しい人、料理が得意な人、元保育士や教師がいることもわかる。

▼間伐材で作ったシーソー

◀野菜畑の草むしりをする親子
▼草取りの少年



◀ヒノキを切る
▼切ったヒノキの皮をはぐ作業

▼中野さん母娘（左）と収穫した野菜（右）

「焚き火の煙がけむたいと思いますが、これは蚊やブヨを避ける効果があるんですよ」と教えてくれたり、アルコール漬けのマムシを持参してその生態や効能を教えてくれたりする人もいた。それぞれがそれぞれの得意分野を持ち寄り、知識や情報を分け与える。たくさんの人の力があって「森の楽校」が成り立っていることがよくわかる。

〝楽しく学ぶ〟がポイント

「森の楽校」には畑や果樹園があり、キノコの栽培もしている。

「〝DASH村〟みたいに自給自足したいね、とみんなで話してね。でも、1カ月に1回ほどしか来ないので、雑草が生えて、畑はどうしても荒れてしまう。野菜や果樹の若芽も鹿やイノシシにほとんど食べられました」と苦笑する八谷さん。というわけで、この日の午前中はみんなで「森の畑」の手入れを行うことに。生い茂る雑草を抜き、鍬で畑を耕し、堆肥を入れる。ジリジリと太陽が照り付ける炎天下、子どもも大人も汗をかきながら一生懸命作業する。1時間ほど経つと、秋野菜を植え付ける準備が完了し、オクラ、ミニトマト、ゴーヤ、バジルなどの夏野菜が収穫できた。

八谷さんによると、「森の楽校」では森の整備や畑仕事などの「作業」と、ピザづくりや木のスプーンづくり（木工ワークショップ）などの「遊び」を上手くミックスさせながら、子どもたちが飽きずに森で過ごせるように工夫しているという。

「最近の子どもたちは、山に遊びに入ることも、木に登ることもしない。子どもだけでなく、親も経験がないから子どもに教えることができない。『森の中で楽しく、自然について学び、森を好きになりましょう』という思いを込めて〝森の楽校〟と名付けたのです」と八谷さん。

平成27年から参加しているという中野光子さん、良美（りみ）さん（中1）母娘に話を聞いた。

「ここに来るようになって、子どもは虫を捕るのも、トカゲを触るのも平気になりました。子どもたちは、私が用事で参加できない時も行きたがり、友人に託したこともあるほどです。ここでは男も女も関係なく、のびのび過ごすので、私自身もリフレッシュできます」

ランチタイムがまた楽しみだという。最初は各自おにぎり持参で、味噌汁だけここで作っていたが、そのうち竈ができて、みんなで料理するようになった。「竈で炊いたご飯、これが美味しいんですよ。2～3升を一度に焚くからでしょうね。それからピザ窯が築かれ、ピザやパンや焼き芋を焼いたりしました。料理の得意な人が料理持参で来られるので、いつの間にやらテーブルに美味しいご馳走がいっぱい並ぶんです！」と中野さんは言う。

残念ながら、この日はコロナの感染拡大予防のために料理づくりは中止。各自持参してきたお弁当を広げてランチタイムを楽しんだ。

▼皮をはいだヒノキは、ツリーテラスの改修に使われる

木を倒し、皮をむく

お昼ご飯を食べ終わり、そろそろ午後の作業に入ろうかという時、末長さんからアナウンスがあった。「もう少ししたら大雨になるという天気予報が出ています。荷物をテントの下に移動して、屋根のあるところで待機してください！」

山の天気は変わりやすい。こんなふうに最新の気象情報を収集して、的確な指示を出してくれるリーダーがいるのは心強い限りだ。

30分ほどしてスッキリと雨が上がると、再び末長さんから声がかかる。

「では、今から3つの班に分かれて、古くなったツリーテラスの改修を行います！」

6年前に作ったテラスは床が腐りかけているため、この日は土台の撤去と、新しいテラスに使うヒノキの伐採、樹皮をむく作業を行うのだという。

「子どもたちは倒したヒノキの皮むき作業をしてください」という末長さんの言葉に、子どもたちが一斉にブーイング。どうやら大人と一緒にテラスの解体をしたいらしい。「でもね、皮むきは今が一番適した時期なので、面白いようにスルスルむけるよ。まずは竹を研いで、皮むき用のへらを作ってください。ナイフを使うときは気を付けてくださいね」

「森の楽校」では、活動中に起きた事故やけがは原則、自己責任となる。というのも、ここは普段は閉鎖しているエリアを、この日だけ特別に市民に開放しているため、活動中の事故は参加者たち自身で防ぎ、対処する必要があるのだ。

森の中での活動だから、虫に刺されることも、ケガをすることもあるだろう。そうしたことを防ぐため、専門知識を持った人や大人が自然の中で安全に過ごす知恵を子どもたちに伝える。竹のへら作りも、経験したことのある年長者がナイフの使い方を教えながら、一緒に作業をした。子どもたちはこんなふうに森の整備や遊びを通じて、〝自然〟と仲良くなっていくのだろう。

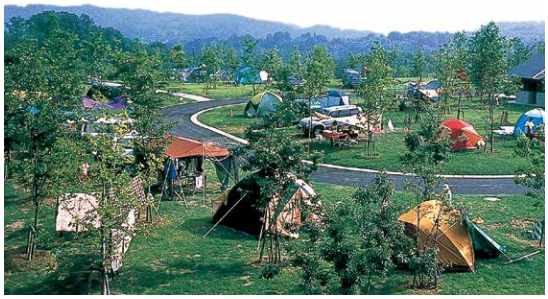
人々が集まる森をつくることは、人とのつながりを深め、子どもたちの感性や創造力をも磨く。里山の自然を健全によみがえらせることは、環境保全に役立つだけでないのだと改めて感じた。

文・写真／小田礼子

国営備北丘陵公園はこんなところ

中国地方で初の国営公園。340haの広大な園内にはインフォメーション・売店・食堂などがある「中の広場」、茅葺農家・神楽殿・工房・田畑など中国山地のふるさとの景観が再現された「ひばの里」、春から秋にかけてたくさんの花が咲き競う「花の広場」、「林間アスレチックコース」、「サイクリングコース」、「ディスクゴルフコース」、グラウンドゴルフや桜が楽しめる「つどいの里」、思いっきり遊べる「大芝生広場」、ありのままの自然の残る「いこいの森」などがある。

▲公園入口　▼オートビレッジ



▼ひばの里

●国営備北丘陵公園 備北公園管理センター 企画広報課
☎0824-72-7000

山村に生きる人々の知恵を継承する

にし阿波［傾斜地農耕システム］

●徳島県美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町

美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町からなる「にし阿波地域」には、標高100～900mの山の斜面に張りつくように200近くの集落が点在する。平成30年に「世界農業遺産」に認定された、里山の農耕文化「傾斜地農耕システム」と人々の暮らしを取材した。

▶斜面に張りつくように並ぶ家々（美馬市）

▼野鍛冶の大森豊春さん

世界農業遺産に認定された里山の暮らし

空路東京から徳島へ。空から見る四国は深緑色の山に覆われていた。空港からすぐに山間部に入り、コンパクトカーでもぎりぎりのカーブを何度も越えて、目的地を目指した。

にし阿波地域では、段々畑のように傾斜地を水平に切り開くのではなく、傾斜地のまま用いて400年以上にわたり農耕を行ってきた。急峻な山地で傾斜が40度にも及ぶことのある土地での農耕は、やがて独自の技や農具、知恵を生むに至る。傾斜地で水田に適した土地が少ないため、アワやソバなどの雑穀をはじめ、果樹、茶、野菜各種と少量多品目を栽培、原則自給自足の暮らしが続く。傾斜で畑の土が流出しにくいよう、乾燥させたカヤ（ススキやチガヤなど）を畑にすき込み、それでも下がった土は、サラエという伝統の農具を

▲斜面で少量多品目の野菜を栽培する畑

風土と食文化を継承する

使って「土上げ」を行う。

こうして継承されたにし阿波地域の山村景観や食文化、農耕の知恵、伝統行事などのすべてを含んだ「傾斜地農耕システム」が、世界農業遺産に認定されたのは平成30年。世界農業遺産は、伝統的な農水産業を営み、世界的に重要と認められる地域を国際連合食糧農業機関（FAO）が認定する制度で、世界で22カ国59地域、日本では11地域が登録されている（令和2年3月現在）。同地区は、日本三大秘境として知られる祖谷（いや）地区を含むこともあり、平成29年までの10年間で外国人宿泊者数が約30倍に。国内外から注目を浴びている地域でもある。

里山の原風景を求めて、車を走らせた。

にし阿波の知恵を受け継ぐ野鍛冶

つるぎ町の一宇明谷（いちうみょうだに）地区で、土上げを行う伝統農具を加工修理する野鍛冶の大森豊春さん。農業を営みながら、農具の修理などの鍛冶仕事も請け負う80歳だ。鍛冶の仕事は若いときに刃物で有名な高知へ出稼ぎに行き学んだのだという。野鍛冶は県内でも希少な存在となってしまった。

「昔は野鍛冶が何人もおったが、年でおらんなってしもた。自分とこの農具を直してたら、うちの道具も修理を頼むわってみんなが持ってくるじゃろ。今ではもう車で何時間もかけてもってくる人もおる」。土上げのサラエは、にし阿波地域伝統の農具。大量生産の鋳物の既製品では、使いにくく長持ちしないのだという。「自分のは鋼鉄を打って作るけん、ちびない（擦り切れない）。それに農業をやっているから、どうすれば使いやすいか分かるけん工夫できるし、この角度で縮める、延べるとか注文通りにできる。手作りだとなんでもできるよ」。後継者はと尋ねると「いない。農業する人も減って、鍛冶では儲けにならんのじゃ。伝えるような若い人もいない」と静かに首を振った。

自身の畑では、センバ（高菜の一種）やほうれん草、白菜、柚子、ソバなど、さまざまな作物を作っている大森さん。傾斜地の畑にぐっとサラエを差し込み、重い土を引き上げる。急傾斜の畑を難なく歩き、階段を上る動作も軽快この上ない。鍛冶の工房も自身で建てたのだと言う。思わずその元気の秘訣を尋ねると、自然体で生きてるからだ、とさらり。「ここのは平坦地のより美味いよ」とふかした里芋でもてなしてくれた。里芋は力強い大地の味がした。

百姓とは百の仕事をできる人のことだという。その通り大森さんは山で生きる知恵の宝庫だ。にし阿波の山の恵みこそが、健康長寿の源なのかもしれない。

▲大森さんご夫妻

▲上／鍛冶で先を継ぎ足した農具　下／農機具が置かれた工房

地元の女性が活躍する「藤の里工房」

三好市の名勝地大歩危（おおぼけ）よりもさらに奥、美しい渓流沿いに「藤の里工房」はある。紅葉シーズンにはこの辺りも観光客で賑わうのだという。

代表の岡田正子さんは78歳。藤の里工房の前身は、農家の主婦たちが集まって地元の農産加工品を製造する「生活改善グループ」だった。大歩危の近辺にある3つのグループが集まって平成11年にできたのが同工房。今年で21年目になる。

工房のなかには、餅つき機のリズミカルな音が響く。しゅんしゅんと蒸しあがるもち米、

鼻をくすぐるよもぎの香。その日は3名のスタッフが分担をしてきびきびと仕事をしていた。働いているのは近隣の主婦が多い。

「働きやすいって喜んでくれてます。この辺は農家だからお茶やぜんまいの時期など、農繁期で忙しいときは話し合って休んでもらえるようにしているの。介護や育児もそう。もともと生活改善で始めて、地域の活性化を目標にしてきたからね」と笑顔をこぼす。工房では81歳まで働いた人がいたというから驚きだ。仕事をやめてからもよもぎやふきを植え、材料の生産で関わっているそう。雇用だけでなく材料の買い上げでも地域に貢献している好例だ。

「うちはお餅がメインなんですが、都会にはない味だから東京や神奈川、名古屋からも注文が来ます。3回も注文してくれるリピーターさんがいたりね。手作りこんにゃくも薬品ではなく灰汁を使って作るの。ほかにもジャムや佃煮、こんにゃくなど20種類近くの農産加工品をお土産として販売しています」。

あまりの良心的な価格に、客のほうからもっと値上げしたほうがいいと言われたこともあるそう。コロナ禍で一時売り上げは落ちたが「これからお正月用のお餅でまた忙しくなると思います」と笑顔で前を向いた。

移住者の農家レストラン「風和里」

東京からやってきた一家が運営している農家レストランがあると聞いて、美馬市の渕名地区へ向かった。山道を登って到着したのは平成29年にオープンした農家レストラン「風和里」。地元の人がランチにお茶にと足繁く訪れる憩いの場となっている。里山の風景を一望するテラス席は、徳島市内をはじめ都会からの観光客にも人気だそう。

運営しているのは、東京生まれ東京育ちの大竹一さん(69)一家。妻の桂子さんの実家が渕名にあったことから平成28年に移住。農業の経験はなかったが、自分の畑でも野菜を作り始めた。レストランでは自家製の野菜と地元の農家の人々が持ち寄る旬の野菜をふんだんに使った料理を提供する。

週替わりランチを注文し、その徹底した地産地消ぶりに驚いた。メインの八宝菜に阿波尾鶏(徳島県のブランド鶏)を使った茶碗蒸しが添えられ、春菊の胡麻和え、大根と甘柿のなますなどの小鉢が並ぶ。ご飯には鳴門のわかめが入っていた。どれも地元でとれたての旬の素材。いきいきとした味わいで、滋味滋

▲美しい渓流沿いに佇む藤の里工房

▲左／人気のよもぎ餅の製造　右／きゃらぶきやこんにゃくなどの農産加工品

▲岡田さん(左から2番目)と工房で働く皆さん

◀上／少量多品目を栽培する畑に囲まれた農家レストラン風和里
下／家族4人でレストランを運営している大竹さん一家

▶広い空間の店内。テラス席からは美しい山々の風景が楽しめる
▲「風和里」の週替わりランチ（現在￥1,300）

養に身体が喜ぶのが感じられる。

大竹さんは言う。「徳島の人たちは他人を思いやる気持ちがすごく強いんです。自分より他人のことといった感じで、困ったことない？って聞いて、野菜作りでも親身にアドバイスしてくれる。ここに来てよかったと思います。だからこそ、恩返しがしたい。レストランの料理で、渕名地域の良さを発信して地元の人に喜んでもらいたい。いい循環を作りたいんです」。

大竹さんは自らを例に、にし阿波地域への移住への取り組みにも積極的だ。「子育て世代もびのびできていいのではないでしょうか。いまはネット環境も整っていますから、テレワークで仕事もできます」とにっこり。

「ここは時間の流れがゆっくりでストレスもほとんどない。寿命が何年も延びる気がしますね。自然と共存する野菜作り、そして料理でみんなに喜んでもらえるのが生きがいです」。

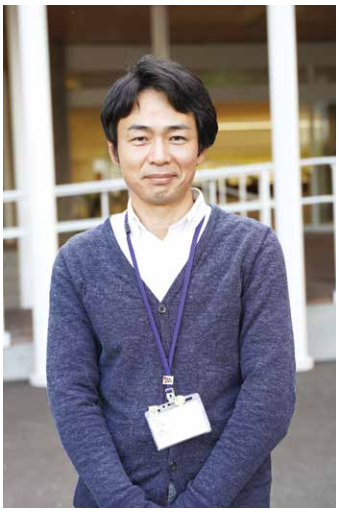
未来へ受け継ぐ農業遺産

徳島剣山世界農業遺産推進協議会は平成26年7月に発足、「にし阿波の傾斜地農耕システム」の保全・継承活動、それに伴う地域の活性化を図る活動を行っている。徳島大学農研機構、（一社）そらの郷、商社、各地の青年会議所等が正会員に、各地域の農業振興団体が賛助会員として運営・活動を支えている。同協議会の事務局を担っているのがつるぎ町役場産業経済課。「にし阿波の傾斜地農耕システム」の推進を行う大島理仁さんに話を聞いた。

「皆さんとても素敵な方でしょう？田舎のイメージを変えたいですね。にし阿波地域は面白いな、住んでいる人もかっこいいな、と思ってもらえるといい。世界農業遺産に認定されたこの日本の原風景を維持し続けていくために、情報をどんどん発信していきます」。

山間地域の暮らしを守る人々。印象的だったのは、その土地ならではの日々を彩る知恵の数々だ。脈々と受け継がれた人々の知恵が、文化となり、やがて世界に認められた。価値観が激変しつつあるウィズコロナ、そしてポストコロナの時代でも、より大切な宝として未来へ受け継がれていってほしい、そう願いつつ山を下りた。

文／二階堂ねこ　写真／高良真秀・嶋香織



▲つるぎ町産業経済課大島さん

●つるぎ町産業経済課　☎0883-62-3111
●藤の里工房(三好市)　☎0883-84-2737
●風和里(美馬市)　☎0883-56-0725

▲小平地区と滝貞地区の上流域にあるため池

▲両合川橋と棚田の風景

▶上／小平地区の上の山にあるクヌギ林　下／だんご汁

クヌギ林とため池、棚田を保全する［両合棚田を守る会］

●大分県宇佐市

風土と食文化を継承する

次世代に受け継がれるべき伝統的な農業や農法に伴って育まれた文化、景観、生物多様性などを「世界農業遺産」とする国際連合食糧農業機関のプロジェクトから、大分県国東半島と宇佐の「クヌギ林とため池がつなぐ農林水産循環」が平成25年に認定された。

宇佐市は市内院内町の「両合棚田」を「世界農業遺産」のシンボルスポットと位置付け、支援を始めたのだ。一時期は、水稲作付面積が棚田全体の5％ほどまで落ち込み、地元は危機感を募らせていたが、宇佐市の支援に力を得て5年前に「両合棚田を守る会」を立ち上げた。田植えの終わった頃に小平地区を訪ねた。

棚田集落を支えてきたため池と里山

地元で知られた余温泉から舗装道路を上り詰めると、小平川の西側に小平地区、東側に滝貞地区が現れる。滝貞地区から小平川まで続く傾斜地に美しい自然の曲線を描く畦が段々に幾重にも重なり、田植えが終わったばかりの両合棚田の水面が輝いている。

この地では、室町時代から耕作が始まり、江戸時代には現状の石積みが築かれていたと言われる。その当時は500枚も600枚もの棚田が連なっていたらしいが、平成11年に「日本の棚田百選」に選定された当時の記録では、両合棚田の面積は7ha、棚田147枚となっている。両合棚田を守る会の会長を務

▼上／ため池の淵にいたツチガエル
下／ため池の近くで土の中から姿を現したキノコ

める石井一男さん(80)によると、現在、水稲を作っているのは比較的広い田んぼを選んで50枚ほど。両合棚田を挟む滝貞地区と小平地区を併せて10世帯、人口は22名だ。このうち両合棚田で水稲を作っているのは滝貞地区で1戸、小平地区で4戸である。

小平地区の急斜面に建つ一男さん宅の庭から、小平川の対岸に滝貞地区と両合棚田を一望できる。

「今日は久し振りの雨じゃ。この雨は私たちにとっちゃお金が降りよるようなもんじゃ」と、今年は雨が少なく田植えの準備が遅れぎみだった一男さんが雨空を見上げる。

「ここん川(小平川)は山が浅いんで、雨が降ったらその日のうちに川が溢れるごつ(ほど)流れるけど、次の日は、あの雨はどこ行ったというごつ、もう水はないんじゃ」

確かに急な傾斜地ではあるが、高く深い山は見当たらない。そんな地形であるが故に、水稲栽培には「ため池」が必須の要件になる。資料によると国東半島・宇佐には約1200カ所ものため池があるそうだが、両合棚田の灌漑用水源としては1つのため池がある。しかし、最近は水稲を作る棚田が少なく、今年、ため池の水を棚田に引き入れたのは、7月上旬までは2回だけだったそうだ。

雨が小降りになったので、集落の南側の山の中腹に造られたため池へ行ってみた。小平地区から林道を上ると道路の右側に椎茸の原木となるクヌギ林が続く一画がある。そこから左へ折れ、上流へ向けて歩く。途中何度か迷いながらもため池に辿り着くことができた。

水量は多くなさそうだが、雑木の森の中で鏡のように静かに水を湛えている。いつの時代に造られたため池なのか不明だが、両合棚田147枚の田んぼ全てで稲を栽培していた時代には、無くてはならない貴重な水源だったはずである。ため池の淵を歩くと、ツチガエルが何匹も驚いたように足元から飛び出していく。たった今、土の中から傘を突き出したキノコも発見した。ため池の恵みとでも言えるのか、単なる森の中とは異なる生命の営みを感じることができるのだ。

「のろよこい」に皆が集合して

ため池探訪を終えて一男さん宅を訪ねると、妻の康美(こうみ)さん(72)が「お茶を食べるかえ」と労を労ってくれた。

「わしゃ変わり者でな、19歳の時に農薬を使わん椎茸農家に世話してくれろと頼んで、ここに嫁に来たんや。滝貞、小平へは嫁に行くなと言われよった所へ来たんや。その当時は椎茸を2トンしよった。牛も飼いよった。生産牛を20頭。両合棚田を守る会ができたろ、それでみんなが会うようになったんで、皆活き活きしとるで。腹を立てて、好かんこつ言うても一日、楽しゅうに笑うて良いこつしても一日。そうじゃろ。それが人生じゃろ。ここが故郷や。ここを残して欲しいと思うちょる、願うちょる。それがずっと頭から離れんのよ」

そんな康美さんの話を傍らで聞いていた一男さんが、棚田を守る会が行っている行事を教えてくれる。2月か3月には地元大学生を対象に駒打ち体験を行ない、打ったほだ木に

▲両合棚田と滝貞地区 画面中央の白い屋根が「むっからや」と呼ばれる集会場

▶上／田植えの準備をする石井一男さん。下／奥さんの康美さん。「ここを残して欲しい」と語る

自分の名前を入れ、次回来た時に成長したほだ木が確認できるようにしている。6月には町から田植えに来てもらい、秋には刈り入れも体験してもらうのだと言う。

「大きな行事の合間にも10人位の小さなイベントはしよったよ。今年はコロナ禍でみんな中止になったから会うこともなく、皆、何しよんじゃろと言うようなもんじゃわ」

そんな事情もあったためなのか、この地域に昔から伝わる「のろよこい」をしようということになったのだ。久し振りに何年も行われなかった田植えの後の「一休み」をしようというのである。

「私が小さい頃には一家に平均で10人は居った。子どもは6人も居るし、両親、祖父母、曾祖父母が皆一緒に居ったからな。勤め仕事がなかったもんで、田植えの遅れた家は皆で手伝って、だいたい同じ頃に終わるごとしてな。明日から3日ぐらい『のろよこい』をしてくださいと、言うて回りよった」

一男さんの思い出だ。

「のろよこい」の当日、両合棚田の中ほどに建つ「むっからや」と呼ばれる集会場では、両合棚田を守る会の女性たちが「だんご汁」作りに精を出していた。ガス台に掛けた大鍋には、地元名産の椎茸はもちろん、細かく切った大根やゴボウ、人参、カボチャ、油揚げなどが入った味噌汁が煮上がっている。そこに大きなボールで捏ねた小麦粉の一片を引き延ばして、女性たちが各々投げ入れていく。

「何にもねえ頃な『また、これかい』というくらい毎日のように食べよったな。もう食べとうねえ思いよったがな」

誰かが口火を切ると、子どもの頃の思い出話に花が咲く。「いのこ」と呼ぶ調理場外の貯水槽には、洗い物をするため山からの湧き水が流しっ放しにしてある。

一番の若手は小平地区の石井早千恵さん(65)だ。小平地区からは石井康美さんと衛藤スミ子さん(82)の2人と、滝貞地区からは衛藤典子さん(68)と川野妙子さん(75)、衛藤政子さん(79)の3人が参加している。

だんごを引き延ばして汁に投げ入れ、両合棚田で作った米でおにぎりを握りながら、地域の友だちが入院している話題から今年の行事が皆中止になってしまったコロナ禍の話へ、そして再び昔話へと話題は移る。

「田舎に住んどって良かったな。マスクせんでも良いしな。町に買い物に行ったら全員マスクしとるよ。私らは常識知らんと思われたやろな」「昔は、ほとんど二毛作で、稲を刈るとすぐに小麦を植えて忙しかったんじゃけど。昔は麦飯を食わされよったからな」

「だんご汁に入れたカボチャはうっせ（美味しくない）で好かん（と夫が）言うけんね。昔は、ニガウリ(ゴーヤ)を入れよった」

とりとめなく賑やかな話をしているうちに、食事の準備が整ったようだ。だんご汁とおにぎりの他にも、キュウリとワカメの酢の物、タケノコと油揚げの煮付け、キュウリの塩漬けなどが並び、デザートの泡雪もある。

皆に声をかけ、宇佐市役所の世界農業遺産を担当する椎野純主幹と藤本晃平さん、今年6月から地域おこし協力隊として赴任したばかりの伊藤高広さん(34)が家族と一緒に参加。始めに会長の石井一男さんが挨拶をすると、賑やかな「のろよこい」が始まった。コロナ禍の昼食であるためアルコール類は出ない。

「久し振りにだんご汁食べた。懐かしい。

▶右上／昔話をしながら料理を作る女性たち
中／たけのこの煮付けやだんご汁と棚田米のおにぎり等
下／「のろよこい」に集まった人々

何十年ぶりじゃろか」と誰かが声に出すと、皆が頷いている。だんご汁は、近頃ではほとんど家庭の食卓に出る機会はないようだ。分厚く大きいだんご、薄く小さく上品なだんご、延ばして大鍋に投げ込んだ女性たちの個性がだんごの形に反映されている。少し粘り気があり、優しい味噌味である。

世界農業遺産に認定されて

「冬は炭焼きをして20万円ほどの現金収入があれば、生活はできよったな。生活にゆとりがあった。でも世界農業遺産に認定されたお陰で防獣柵ができるまで、何十年ちゅうてタケノコを食べたことなかったな。鹿と猪にやられてしもてな」熊本県の球磨村から研修に来た農家が『防獣柵がないのにびっくりした』と言いよった。農業遺産のお陰で、集落を取り巻いて柵がしてあるのは見えんけんな」と一男さんは言う。両合棚田の景観を保全するため、通常田んぼを囲むように設置する獣害対策の柵を、大きく集落を囲むように山林の中に設置してあることを指しているのだ。

設置には、地元滝貞地区から衛藤政夫さん(69)、小平地区から石井初夫さん(58)、それに石井一男さんの3人が参加した。

「平野部で作る田んぼでは人件費が棚田の10分の1しか掛からんというな。それでも採れる米は棚田の方が平野の半分。佐賀県の棚田農家が言っとったな、1俵5万円でも採算はとれんと」

「自分とこの田んぼは乱したくないな。そこが山か田んぼか分からんようになるのは見ておられん。5、6年前は全然だめだった。7haのうち4aぐらいしか米作ってなかったもんな」「温暖化が進みよるぞ。80年ここに住んじょる人生の中で、冬に氷が張らんじゃったのは今年が初めて」

結論を求める話がある訳ではないが、四方山の話を集落の皆が語り合うことで、繋がり合う無形の共有財産が生まれているようだ。

ここで両合棚田を守る会の石井一男会長に世界農業遺産に認定となる経緯を聞いた。

「若い頃、ここらは夏は米作り、冬は炭焼きで生計を立てよったけど、炭焼きじゃ将来性がないと分かって、椎茸作りを始めたん。種駒を年間30万個から40万個入れてな。椎茸専業農家でやって、棚田百選に選ばれた頃までは700aの田んぼがあって格好良かったんじゃ。それから獣害が出始めて米作りを止めるようになってな、50aほどしか作らんようになってしもて……。ちょうどその頃、国の農林水産省から出向して来とった山本部長さんが、宇佐市は宇佐神宮があるけど、農業遺産には関係ない。それで『農業遺産になるようにどげかせんかい』と毎日のように訪ねてくれて、私たちの要望を聞いてくれるなら と引き受けたんじゃ。地元負担は一切ない、人力奉仕はするということでじゃ。18年以上放棄しちょった田んぼをトラクターの小さいのを自分で買うて、毎年拓いて4年掛かったで」と一男さん。

「獣害対策の柵が一番大変。田んぼの脇に金網が写るとだめじゃ。山ん中に金網を張ってくれと……。山ん中に金網を入れたもんじゃからな、助成金の対象にならない。それで山本部長さんがな、国の予算を直接取ってくれて、山ん中に道を造って金網張ってじゃからな、何ぼ掛かったかは分からんのじゃけど、獣害対策専門家という人が『これだったら私の思っていたような柵が出来ました』と言ってくれたんじゃ。農水省の本省から視察に合わせて21名来たで。サツマイモでイモ餅を作って棚田でできた米でおにぎり。出した物を『美味しい美味しい』とすぐ食べてしもた。ああいう素朴な物を食べたことなかったんやろか」

両合棚田で秋の稲刈りが終わると、山の仕事で明け暮れるという石井一男さん。

「山仕事ばっかり。80歳にもなるのに、(椎茸の)原木を出しよるんじゃ。杉の植林が3200本、2haの間伐。毎日、山ん仕事んじょうじゃから、会うのは鹿や猪ばかりじゃからな。それで私たちゃ長生きしよるんじゃけど。ここは空気と人情だけはどこにも負けん。米と椎茸は繁忙期がズレとるから、一年中仕事ができるんじゃき。外から若い人が入ってくれて、自立して生計を立ててくれると良いんじゃけど」

世界農業遺産という大きい看板を背負った両合棚田の魅力を訪ねてみると、取り巻く自然や農業システムの魅力はもちろんだが、印象的だったのは、石井一男さん夫妻の地域を思いやる情熱と、天まで届くように棚田の石垣を積み上げた先人たちの努力の跡だった。

写真・文／芥川 仁

●宇佐市観光・ブランド課　☎0978-27-8156

◀サツマイモを植えるために畑を耕す一男さんに近所の夫妻が話しかける

ほっこりのどかなそばの里

遊休地でそば栽培［ごっとん会］

●岩手県山田町（やまだまち）

高齢者でも地域おこしができるんだ！　聞いたこともないワークショップやクラウドファンディングにも挑戦するよ。母さんたち、父さんたちで頑張るよ。

そんな思いから、水車小屋を目印に、そばをキーワードに奮闘しているのが山田町白石集落の「ごっとん会」である。種まきの日は雨天で中止、そば刈りの日にようやく取材できた。

▲「ごっとん会」のメンバー。左より中村のり子さん、菊地八代子さん、中村あづ子さん（前列）、中村光一さん、千葉勝見さん

◀ごっとん茶屋の「そば御膳」

水車小屋を拠点に農業生産組合を発足

山田町は宮古市と釜石市の間に位置し、三陸海岸特有の山間部が海岸に迫る地形で平野が少ない。人口は1万5000人弱で、高齢化率は38％を超える。波の穏やかな山田湾では牡蠣やホタテが養殖され、里山ではマツタケが採れる。

その山田湾の海岸から内陸に織笠川を5㎞ほど遡り、支流の白石川沿いの中山間地に白石集落がある。川沿いの平地に田畑が細長く連なり、森林が迫る。25世帯ほどの白石集落は、古くから稲作を中心に畜産も営まれてきた。平成23年に人口減少の著しい集落に、人が集まるランドマークとなるように新たに作り直されたのが白石集落の水車小屋だ。この水車小屋を中心に地域起こし活動を続けているのが白石集落農業生産組合の「ごっとん会」だ。

白石集落農業生産組合は白石集落とその近隣の住人で組織され、組合員は現在13人。平均年齢は70歳代。東日本大震災直前の平成23年2月に立ち上げ、少子高齢化で活気が失われていく集落の現状を改善するために、人を呼び込む活動を目指した。手始めに、遊休農

◀左上／水車小屋
左下／白石集落
右／実ったそばの実と花

地を利用してそばを育てることから始めた。収穫したそば粉を町のイベントなどで販売し、次にそば打ちを習得、平成26年にはそば打ち体験のイベントで人を呼ぶこともできるようになった。

その後2年かけ、専門家のアドバイスを受けながら、農村の高齢者にとって初めて聞く「ワークショップ」なるものにも挑戦。年に何回も開催し、お茶っこを飲みながら今後の方針を検討したり、メニュー開発を行なった。

その中でごっとん会のテーマを「つながり」とし、①ほっこりのどかに、②自然と共生しながら、③声をかけあい協力してゆっくりと、④必ず少しはお金をかせぐ、の4つのルールを定めた。

中でも、お金をかせぐことは、活動を持続化させるためには重要な要素との思いがある。そのため自分たちで育てた野菜と手作り郷土菓子の販売、そば茶屋を開くことにした。

日曜日は手打ちそばを「ごっとん茶屋」

水車小屋に隣接したそば茶屋「ごっとん茶屋」の開店は令和元年12月。いただき物の約25㎡のプレハブを移築して、内装や風除室の増設など必要な資金をクラウドファンディングで集めることにした。同年3月に募集を開始し、約2カ月で目標以上の155万円が集まった。その資金をもとに営業開始となった。

カウンター席のみの5人も入るといっぱいになる店だが、地域にとっては大きな一歩となった。営業は毎週日曜日のお昼のみが基本で、限定30食。そば打ちをするのは一人で、打ち立てを提供するために1日30食が限界だそうだ。粗挽きのそばには、地元特産の海藻「アカモク」が練りこまれ、モチモチ感があり、のど越しが良いと評判だ。そばつゆには、山田産の上質な椎茸と煮干し、三陸産の昆布で出汁をとっている。野菜の天ぷらや小鉢が付いたそば御膳(税込み1000円)のみの提供で、他に団子や蒸しパンなど、組合員が作った手作り郷土菓子なども販売している。開店当初はお客さんが少ない日もあったが、徐々に知られるようになり、3月は完売することが多かった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、4月から営業を休止している。

白石集落農業生産組合の組合長で、そば打ちを担当する中村あづ子さん(60)は、「県外など遠くからも来てくれ、とてもやりがいがあります。利益は少ないですが、こういった場所を作って引退後の生きがいになればと思います」と語る。

組合員では中村さんが最年少で、70歳代の人が多く、今も農林業に従事している。

そばに関しては、種まきから収穫、そば打ち体験など年に数回イベントを開催し、交流人口の増加にも貢献している。外部から人が

▲水車小屋(右)と作業場。「ごっとん茶屋」は、左へ10mほどの場所にある

▲そば刈りに集ったメンバーの昼食と彼岸用の団子づくり

▲町内からの注文で作っている彼岸用の団子(中村さん)

◀そば刈り作業は重労働だが、楽しい休憩時間

来るようになったのは、平成14年にそば打ち体験を開催するようになってからだ。令和元年は4月にジャガイモとトウモロコシの種まき、5月にサツマイモの植え付け、6月に芽キャベツの植えつけ、8月はトウモロコシ、ジャガイモの収穫とダイコンの種まき、11月にダイコンの収穫など年間10回のそばと野菜づくり体験会を開催した。

海の体験、食の体験「やまだワンダフル体験」

山田町では、体験型観光を推進するため、「やまだワンダフル体験ビューロー」を立ち上げ、体験プログラムづくりや来客コーディネート、情報発信などをしている。

穏やかで美しい海岸には海水浴場もあり、カキ、ウニ、ホタテ、アワビ等の海産物も豊富。これらの恵まれた自然を生かして実施されている。代表的なものは、漁船に乗って養殖漁業を見学したり、三陸の海を体験するプログラム。山田町ならではの食を学ぶ「食体験」、そして里山を訪ね、農家の人と交流したり暮らしや食文化を知る「里・暮らし体験」などがある。他に、住民のガイドで街を散策、東日本災害時の様子や復興の状況を学ぶプログラムも随時行われている。

町外の人の参加や体験が多くなり、交流人口の増加に繋がっている。その中に白石集落のそば打ち体験もあり、インターネットなどで集客している。

令和2年7月12日に白石集落で行われたそばの種まき体験日は雨のため、種まきは中止となったが、水車小屋で石うすを挽いてそば粉にする体験に変更、子どもたちが挑戦し黒いそばの種から白い粉が出てくる様子を面白がっていた。集落外の人が5000円の年会費でごっとん会の会員になると、こうした体験に無料で参加できる特典がある。また、組合では毎週日曜日に水車小屋の前で朝市を開催し、お手製の蒸しパンや団子、せんべいもち、野菜を販売している。近隣市町から多い日は20人以上が集まり、売れ行きは好調だ。

令和2年は新型コロナウイルスの影響で岩手県外からの集客ができず、体験会も大幅に縮小し、4月から休止している。ごっとん茶屋もいつから再開するか頭を悩ませている。それでも5反歩(50a)を有するそば畑の収穫は組合員だけで終わらせて、再開後の茶屋の準備をしている。

中村組合長は、「早くコロナ禍が終息して、また皆さんが来てくれるの楽しみにしています。多くの人が来てくれるのが、私たちの元気のみなもとです」と希望を込めて語っていた。

文・写真／村上昭浩

▲そば刈り作業でひと休み

▲刈り取ったそばは天日干しをする

▼そば刈りをする中村あづ子さん

▲養殖いかだを見学する漁船クルーズ

●山田町「やまだワンダフル体験ビューロー」
☎0193-82-3111(内線227)

▲再び緑で覆われたえりも岬（えりも町産業振興課提供）

■郷土を未来へつなげる地域活動――1

北の森よ育て、北の海よ育て

浜の母さんたちの［お魚殖（さかなふ）やす植樹運動］

北海道漁業生産者の奥様方、いわゆる「浜の母さん」を中心に全道一丸となって始めた「お魚殖（さかなふ）やす植樹運動」は、昭和63年の活動開始から32年を数える。脈々と受け継がれる「魚付林（うおつきりん）」への思いは、木を植える活動を通して、地域に、人々に広がり続けている。森と海との繋がりから、延べ120万本もの苗木を植えた大きな運動の始まり、活動の今の姿、そしてこれからについてご紹介したい。（北海道ぎょれん・杉嶋 純）

森と海とのつながり 魚付林とは

海のそばにある森や海に覆いかぶさるような林は「魚付林」と呼ばれ、昔から保護されてきた。沿岸で漁業を営む人々はみな、海岸林や河畔林をはじめとした豊かな森が魚の住処を作り、その栄養が海の魚を養うことを経験から知っていたのである。「魚は森のある所につく」という考え方は、先祖代々漁民の間で言い伝えられており、江戸時代には諸藩で保護制度を作るなど地域一体となって魚付林を守ってきた経緯がある。

現在行われている「お魚殖やす植樹運動」も古くからあるこの考えに基づいているが、ここに至るまでには、魚付林の教えが守られず、魚付林を失って豊かな海が消えようとした苦い経験があった。

植樹運動の先駆け えりも地域の事例

北海道の中心を南北に走る日高山脈の南端に位置するえりも地域は、特産の日高昆布のほか、秋鮭やツブ貝がとれる、道内でも有数の豊かな漁場を有している。

明治以降、入植・開拓による森林伐採が進み、緑でおおわれていた台地が一時「えりも砂漠」と呼ばれるほどの荒野となったことがある。風にさらされたむき出しの赤土が海を沖合10㎞まで濁らせることもあった。森を失って海がやせ、流れ込む濁った水によって、豊かだった昆布や魚の水揚げはみるみる減少していった。

▶上／赤土に覆われたえりも砂漠（昭和30年代）
下／苗木は数年間育成してから植樹する

▲植樹した苗木は支柱で固定する

▲漁協女性部による草刈り作業（浜中町）

▲すぐ脇を川が流れる大自然の中で木を植える

▲親子参加で植樹

▲広大な植樹地の整備も参加者総出であっという間

▲幼い子供も植樹作業を見守る

海の変化を目の当たりにした地元の漁民は、国（営林署）にその有様を訴え、昭和29年に荒れた大地に草を生やす草本緑化事業の着手にこぎつけた。しかし、立ち並ぶ風車で有名であるように、えりも岬周辺には絶えず強烈な局地風が吹いており、せっかく植えられた草の種も悉く風に飛ばされ、事業は早々から困難に見舞われた。

それから試行錯誤を重ねることおよそ20年。時化（しけ）後に海岸へと打ち寄せられる雑海藻（ゴダ）を表土に混ぜ込むことによって、荒地に草を根付かせることに成功した。続いて樹木による緑化（木本緑化）事業に着手し、荒地のほとんどを再び緑化することに成功し、強風の課題を解決した。

土地が緑化されたことにより、海へと流れ込む土や泥がなくなり、海の色が青に戻っていった。また、魚付林が形成されたことによって、森の養分が海へと注ぎ、漁獲量も右肩上がりで増加していった。森づくりによって漁民自ら海を取り戻したこの偉業は漁業、林業の他、広い分野で今も語り継がれている。

百年かけて百年前の自然の浜を

北海道漁協婦人部連絡協議会（漁婦連：現在の北海道漁協女性部連絡協議会）は、それまで行っていた「海をきれいにする活動」の一環として海と森林の関係に着目し、昭和63年に植樹運動を始めた。先に挙げたえりも地域での環境改善の事例はあったものの、当時漁業者が海のために木を植えるという発想は世間一般にはまだなじみがなく、全道挙げての活動は初めてのことだった。「百年かけて百年前の自然の浜を」――日々漁場という自然環境に向き合う浜の人々が植樹運動にこのスローガンを掲げたのは、今なお続く森林開発による自然環境の喪失が、やがて漁業資源の先細りにつながるということを肌で感じ取っていたからである。

漁婦連は創立30周年に合わせて札幌市内で記念植樹を実施した後、全道95婦人部にて一斉植樹を行い、およそ7万3000本の苗木が北海道の大地に植えられた。以後毎年、各組合挙げての植樹事業が続けられ、近年では年間3万本ほどが植えられてきた。運動を始めてから30余年、漁協系統として植えた苗木は延べ120万本を超え、広大な北の大地の緑と豊かな海を守っている。

地域とともに

お魚殖やす植樹運動は浜の母さんを中心として始動し、その姿を今も変えていないが、直接関係のある漁業関係者が活動に参加するだけでなく、地域のイベントとして広い世代が参加しているケースも多くなった。

道東の根室管内中部に位置する野付漁協は昭和63年から植樹の取組を開始し、平成12年から首都圏の生協会員を産地に招いて植樹ツアーのイベントを開始した。植樹を通して産地と消費者とを結ぶことによって、水産物流通のバックグラウンドにある森づくり・海づくりへの浜の思いを多くの人々に伝えている。ツアーには植樹体験のほか、木工ワークショップや特産のホタテを剥いて味わう体験等イベントが盛り沢山で、本州からの参加者から毎年好評を博す人気の植樹イベントとして定

▲和気あいあいとした雰囲気で作業は進む

▲サクラマスの稚魚とその成魚に見入る子供ら

▲急斜面での作業はまず土壌作りから

▲運動の中心である女性連の役員らも自ら木を植える（当別町）

▲毎年全道から関係者が集って実施する当別町「道民の森」植樹イベント

着している。

道南の日本海側、ひやま漁協では地元の小学生や幼稚園児を招待して一緒に森づくりを行った。苗木の根を覆う紙製容器には、園児ら思い思いの絵を書き、その苗木を自らの手で大地に植える。木に触れる機会が失われつつある現代において、実際に触れて感じる貴重な環境教育の場ともなっている。植樹イベント当日には近隣河川に遡上するサクラマスの稚魚も放流した。大きな成魚の実物を見ながら、手元の小さな容器で泳ぐ稚魚たちのこれからの成長に、子らは思いをはせてくれただろうか。植樹、さらには稚魚の放流の実体験を通して、森と海との大きな関わりを知る次の世代が少しずつ、しかし着実に増えつづけている。

植樹運動のこれから ～木を植え、育てる取り組みへ～

これまでの植樹運動では、運動の拡大を図るため植樹本数の増大を一つの目標として取り組んできた。活動は順調に根付き、植樹は全道各地で盛んに行われるようになったが、ただ木を植えるだけでは豊かな森づくりは達成できない。

苗木が小さなうちは、周囲の雑草との日光獲得競争にさらされることから定期的に下草刈りをし、一定の大きさに育った後には枝打ちをする等、長い年月をかけて世話をする必要がある。

また、地域・樹種によってはエゾシカやウサギ、ネズミによる樹皮や若芽の食害が確認されており、苗木をネットで覆う、周囲に防護柵を設置する等の必要が生じている。

今後は、より実効性のある植樹運動としていくために、植えた苗木を守り育てる育樹の取り組みを強化し、森づくり全体の機運を高めて活動を継続していきたい。

おわりに

お魚殖やす植樹運動を始めて32年。北海道の大地に根を張るかつての苗木達は、長い年月を経て立派な木へと成長し、森を形作っていることだろう。

全世界に猛威を振るう新型コロナウイルス感染拡大による影響は、我々の植樹運動においても例外でなく、令和2年度は多くの漁協が人の集まる植樹の実施を諦めざるを得なかった。これからの植樹運動は、これまでのようにはいかなくなるだろう。しかし、強風に見舞われたかつてのえりも地域がそうであったように、この困難もいつか乗り越え、植樹そして育樹の取り組みがさらに大きく、強い活動になるべく、日々邁進したい。100年前の浜を取り戻すまであとおよそ70年。我々の歩みはまだ終わらない。

杉嶋 純（北海道漁業協同組合連合会環境部）

■郷土を未来へつなげる地域活動――2

「復活の薪」で森と地域に〝暖〟を

NPO法人［吉里吉里国］

●岩手県大槌町吉里吉里

▲森に入って間伐作業をする「吉里吉里国」メンバーたち（以下、当頁写真は吉里吉里国提供）

東日本大震災の大津波で多くの人命や家屋を失った大槌町だが、避難した人々に、町中を埋め尽くしていた廃材を集めて焚火を提供したのが芳賀さんたちだった。不安と寒さの中で皆で集って焚火で暖をとったことがいかに有難かったか、吉里吉里地区の住民は忘れない。森を保全し、間伐した薪を活用しようとNPO法人「吉里吉里国」が設立され、薪は「復活の薪」として販売され、災害以来秋には全町あげて「薪まつり」が開催されている。

▲東日本大震災で、津波に襲われた街の風景

▲廃材や間伐材を切断、カットして薪に整備する

▲山仕事で間伐した材木を運び出すトラック

秋のイベント「薪まつり」

狭い入り江や湾が入り組んだリアス式海岸が続く三陸海岸。そのほぼ中間点に位置する岩手県上閉伊郡大槌町。1889（明治22）年に大槌村と小槌村、吉里吉里村が合併して大槌町が成立した。大槌湾に面し、NHKで放送された人形劇「ひょっこりひょうたん島」（昭和39年放送開始）のモデルともいわれる蓬莱島が湾に浮かぶ。

平成23年3月の東日本大震災では町を大津波が襲い、死者・行方不明者1233人の人的被害、全壊家屋約3000棟、半壊家屋約600棟の甚大な被害を被った。現在の人口は約1万800人で、震災前の約1万600人から大幅に減少している。

東日本大震災の翌平成24年から、吉里吉里地区で毎年秋に薪まつりが開催されている。2日間のイベントでは、例年延べ500人以上が訪れ、薪割りやツリークライミング体験、ピザや肉汁の振舞いなどを楽しんでいる。令和2年10月31日、11月1日に開催された9回目の薪まつりでは、木工教室や地元で狩猟された鹿肉の提供、大槌ウィンド・オーケストラの演奏などのプログラムもあり、子どもからお年寄りまで、地域の人を中心に大勢の参加者が楽しんだ。

このイベントを主催してるのは、特定非営利活動法人（NPO法人）吉里吉里国だ。東日本大震災を契機に組織された同法人は、「森を

◀「薪まつり」で挨拶する
芳賀正彦理事長

育て、薪を売り、地域を造る」ことを使命に活動を続けている。

廃材で薪を作って暖を取ろう

吉里吉里国を立ち上げ、同法人の理事長を務める芳賀正彦さん(72)は「津波でなんもかんも流され、避難所になった学校で、ただじっとしているのは辛いことだった。何かせにゃならんと思ったときに目に付いたのが、街中にころがっているがれきです。流木や家の梁がたくさんありました。よし、この廃材で薪を作ろうと考え、避難所で声をかけたら30人くらいが賛同してくれたんです」と振り返る。大津波の夜、寒さの中で唯一の暖は焚火だった。薪を燃やした火の暖かさは傷ついた人たちの心に染み入った。そうした薪が与えてくれる力を皆が感じた。

芳賀理事長は、元は自動車整備工で大槌町で車関係の仕事をしていたが、退職後に山仕事の経験も多少あり、チェーンソーを扱えたのが幸いした。他のメンバーはまったくの初心者だったが、機械の扱いを覚えながら薪つくりに精を出した。この活動がマスメディアなどで報じられると、全国から注文が入るようになり、約5カ月で街のがれき廃材はなくなった。50トン以上の薪を販売し多少の収益も上がり、手間賃を分配することもできた。だが、ほぼ無償で入手していた原材料が無くなり、次にどうしようかと思案したという。

「ここまでの活動を我々は『復活の薪、第一章』と呼んでいます。そして次に山に入ろうと呼びかけました。津波で海水を被った塩害林を伐採して薪にしようと考えました」

枝打ちや間伐などで森を保全していく「復活の森」を目指していくことにした。

震災9カ月後の平成23年12月にNPO法人として吉里吉里国を設立。本格的に森の保全活動に邁進していく。「このあたりの山の8割は漁師さんが所有する民有林です。でも、木材価格の低迷などもあり、多くは手入れもされず放っておかれた状態でした。本当は間伐や枝打ちをすれば良い木が育つのですが、木が安いので手入れの費用が出ないのです。そこで、我々は一軒一軒山主の漁師さんと交渉しました。タダで良いから間伐させてくれと。その代わり間伐で出た木材はくださいと」。こうして間伐して出た材木を薪にして販売した。これが「復活の薪、第二章」だ。

民有林を手入れし間伐材を活用する

現在吉里吉里国は、①復活の薪販売 ②森林保全整備 ③地域人材育成 ④内外交流促進の4つのプロジェクトを中心に活動に取り組んでいる。スタートは街中のがれきを薪にすることだったが、次に森を生かす活動に軸足を移した。それは、震災時に見た光景が契機になっている。津波で街は消えたが、その周りの山は依然として存在していた。集落の森は、震災前と同じ姿で残っていた。それを見たときを思い出し、芳賀理事長は「森と共存し、その恵みを受容して生きていこう。せっかく

◀「薪まつり」会場には薪も沢山用意される
▼上／女子高校生たちのオーケストラ演奏
下／薪釜でピザを焼いて参加者に提供

▲子供から大人まで、薪割大会
◀上／子供用の木工教室　下／ツリークライミング体験

助かった命を森で活かそう」と決めたという。

①の復活の薪販売プロジェクトでは、これまで利用されていなかった低質間伐材（林内放置材）を薪として活用し、その販路を開拓することで自伐型林業による地域の活性化を目指す。薪の販売は副業の確保にもなり、地域の雇用にも貢献できる。

②森林保全整備プロジェクトは、手入れがされずに放置された状態の荒廃した森を再生することによって環境美化や、海を育み生態系の自然環境作りにも貢献するので、積極的に山主である漁師さんに理解を求めて山の手入れを行っていく。

③地域人材育成プロジェクトは、子どもたちに森に関心を持ってもらうために、森林教室で地元の幼稚園や児童生徒に実地で林業の体験学習を提供するなどして、子どもたちに森や木の大切さを伝える活動。その活動では、薪を燃料としたピザ窯で手作りピザを食べるなど、楽しみながら体験できる工夫もされている。また、大人の世代には林業学校を定期的に開催し、山仕事の技術伝承を行うことで、人材を次代に継承したい考えだ。

④内外交流促進プロジェクトでは、薪まつりの開催や企業研修の受け入れを行い、研修には年間約８００人ほどが参加する。ＣＳＲ（企業の社会的責任）への関心の高まりが追い風になっている。

現在、吉里吉里国のスタッフは４人ほどだが、イベントなどでは大勢のボランティアの加勢を得て運営している。自伐林業は、先進的に活動する四国のＮＰＯ法人「土佐の森・救援隊」に学ぶなど、多くの支援者や団体にも支えられている。

子どもたちに山の大切さを教えたい

「昔の人は子どものため、またその子どものために山に入って木を植えて、良い木は次世代に残していました。でも今は自分の山がどこにあるのか。隣との境界はどこなのか。よく分からない山主さんがたくさんいます。価格が下がったことで興味を持つ人が少なくなり、山が荒れている」と芳賀理事長は嘆く。「だから子どもたちに山の大切さを教えていきたい。子どものうちから森に親しんで欲しい」と。

福岡県出身ながら、妻の実家がある大槌町で40年以上暮らす芳賀理事長。青年海外協力隊でエチオピアに駐在した経験もある。第二の故郷で今も木こりの仕事にも精を出す。

「山仕事は危険と隣合わせです。漆かぶれや梅雨明けからはまむし、夏はスズメバチ、冬以外は熊の気配をいつも感じます。あっと気がつけば重大事故です。斜面を昇り降りしていると、１時間で足腰が動かなくなる。それでも、11月に入り、１年の仕事が終わろうとするとき、自分を心の底から褒めるんです。『オラあ、えらいえらい。よう一年がんばったと』。金には代えられないうれしさがあるんよ。その思いがあるから続けられる」と福岡弁なまりが少し残りながら飾り気なしに語る。

震災から10年が経過する。大幅に人口が減少している大槌町で、地域を大切にと様々な活動で情報発信を続ける吉里吉里国。

今後もその活動が長く継続されることを願いたい。

文・写真／村上昭宏

●NPO法人「吉里吉里国」　☎・FAX 0193-43-1018

■郷土を未来へつなげる地域活動――3

空き家の活用と自然で、魅力発信

「しきしま・ときめきプラン」

●愛知県豊田市敷島自治区

「しきしま・ときめきプラン」は、空き家の活用、都市との交流で確実な成果をあげ、令和2年度過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣賞を受賞。先進モデルとして周辺都市からも熱い注目を集める中長期的な視点とは――。

▲空き家を活用した「すぎん工房」でお菓子を製造・販売する移住者の皆さん

愛知県豊田市「敷島自治区」。大都市名古屋から東へ、自動車産業で知られる豊田市街からさらに東の山中へ入ったところに位置する過疎地域だ。令和2年度、過疎対策の先進的事例にふさわしいとして、過疎地域自立活性化優良事例表彰における「総務大臣賞」を受賞した。

その取り組みの発端は平成22年、深刻化する高齢化に危機感をもった住民が自発的に「しきしま・ときめきプラン」なる将来ビジョンを策定したこと。都市との交流、徹底した空き家活用による移住者の受け入れなど、地域課題の解決に真剣に取り組んできた。その結果、目標の2倍にあたる40世帯98人の移住者の受け入れを達成。受賞に結びついたという。

U・Iターンが相次ぐ人気の過疎地域とは、いったいどんなところなのか。車窓を紅葉が彩る季節、目的地を目指す。名古屋市内から車で約1時間20分、きちんと整備された田畑が印象的な里山の集落が現れた。

住民全員で取り組む空き家対策

「敷島には、移住してきた人が失敗して出て行ってしまうということに対して、この地域の名折れだという感覚があるんです」と話すのは、「しきしま・ときめきプラン」策定委員会委員長、鈴木辰吉さん(67)。

同プランは、平成21年に行われた「若者よ田舎を目指そうプロジェクト」がきっかけで生まれた。これは、全国から集まった10人の若者が、寺院と空き家で共同生活をし、有機農業に取り組むという試み。最初こそ遠巻きに眺めていた村人たちだったが、若者が地域行事などに積極的に参加するのに対し、移住者を放っておけないという空気が醸成されはじめた。また、10年後には約5軒に1軒が空き家になるという調査結果も、住民の意識を変えた。

▶上／「しきしま暮らしの作法」看板
下／「しきしま・ときめきプラン」策定委員会委員長の鈴木辰吉さん
都市と山村の交流をコーディネートする「おいでん・さんそんセンター」のセンター長も務める

▶古民家を改修したサテライトオフィス「SMART VILLAGE」

▲左／スマートインプリメント㈱井上社長　右／古民家を活かした内装

そして住民の総意としてできたのが「しきしま・ときめきプラン」。地区の各家や集会所などに掲示されている「しきしま暮らしの作法」はこのプランの内容を受けて作られている。第3条に曰く「空き家を放置するのはやめよう」。

鈴木さんは続ける。「住民の高齢化で出てくる空き家を使って移住者を受け入れる。空き家オーナーへの説得は、すかしたり脅したり、もう試行錯誤でしたよ(笑)。今では豊田市のマニュアルになるくらい上手くなりました。空き家が出れば、1軒に3件は応募があるほどです」。

なぜそこまで人気なのか。「アンケートで移住理由を尋ねると、1位は自然のなかでの暮らし、2位は温かく迎え入れてくれるコミュニティという結果でした。ジャングルのような自然のなかで暮らしたいわけではなく、山村の自然と豊かなコミュニティを求めているということなんです。荒れ放題の耕作放棄地や蔓におおわれた空き家だらけのところに、移住者は来ないと私たちは考えました」。

農地を荒らさない試み「自給家族」

移住者を温かく迎える共通意識をもち、住民一丸となって空き家や農地を整えた敷島自治区。満を持して令和元年から始まったのが「自給家族」という取り組みだ。

「10年後に田畑を管理できないと答えた住民は55％にのぼります。農家が管理できなくなった田んぼで米を自給する家族を募り、大方の農作業は地域で請け負う長期栽培契約を、参加優先権、お米を返礼品としたクラウドファンディングで募集したところ、立ちどころに50家族が集まり、目標額の２００万円も達成しました。農作業を手伝いたい家族も多くありがたい。今後管理できなくなる田んぼも『自給家族』を増やすことで守って行けると思います」と鈴木さんは言う。

オフィスをおく企業も

企業として敷島自治区に関わっているのが、トヨタ自動車の制御システム開発を委託されているスマートインプリメント株式会社だ。同地区にある築60年の古民家をサテライトオフィスとし、研修の場として、また芋掘りやバーベキューなどの地域との交流の場としても活用している。

代表取締役社長の井上義昭さん(63)は「地域の方も企業が来るというので、当初は不安があったようです。イベントを企画して実際にお話したら距離がぐっと縮まりました」と語る。今では地元の人が気軽に立ち寄ってくれるほどに。「鈴木さんには企業として地元を巻き込んだ面白い試みをしてほしいと言われました。コロナ禍が落ち着いた暁には、新規サテライトオフィスとして、ものづくりをしたい。いずれはここに囲炉裏を作って、地域の方と宴会したいですね」と笑った。

移住促進活動を移住者が受け継ぐ

実際に移住者はどんな暮らしをしているのだろうか。

旧保育園の一部を改装した菓子工房「すぎん工房」では、毎週木曜日に移住者の女性たちが集まってクッキーなどを製造・販売し、スモールビジネスを営んでいる。小学校やこども園の近くにあるため、開店日には子どもを迎えに来る親たちで賑わい、移住者の情報交換の場にもなっているそう。

空き家のリノベーションも行われている。

◀左上／山村部ならではの薪ストーブ
右上／「山村地域移住情報バンク」で見つけたお気に入りの古民家
下／Iターン移住者の深谷暢樹さん一家

◀安藤さん（右から一番目）と「ガキ大将養成講座」参加者の皆さん

平成31年3月に引っ越してきた深谷暢樹さん（40）宅は、古民家をリノベーション、中央に薪ストーブが据えられ、室内は木の香りに満ちている。家や庭を全力で走り回る8歳と5歳の男の子たち。その様子をおおらかな笑顔で見守る深谷さんは、車で50分の市街地へ通勤する会社員だ。

「中山間部でありながら、ここから40分もあれば豊田市街へ出られる。街との距離の近さは大きなメリットです」。移住者たちの仕事のスタイルは、農業や林業をする人、テレワークする人、街へ出る人とさまざまだ。

「地域のさらなる定住促進には子育て環境の充実が重要。僕もその実現に関わっていきたいですね。地域に受け入れてもらった僕らが恩返しできることって、次の移住者を呼べる環境を作り、活動を受け継いでいくことだと思うんです」、深谷さんは静かな決意をみせた。

都市の子どもたちに自然体験を

「安藤さーん！　火をおこせたよ！」。敷島自治区内の山の秘密基地に響く声。子どもたちから引っ張りだこの男性は、「ガキ大将養成講座」を主宰する安藤征夫さん（67）だ。ヤマザクラの大木を基幹とした高さ10m以上のツリーハウスや木製の遊具など、すべて子どもたちやボランティアと手作りしてきた。平成26年から始まったこの講座は、定員40家族の会員を募集すると、日進市や豊田市など都市部からの応募が相次ぎ1時間で枠が埋まる。

安藤さんは「自然のなかで自らの課題を解決していく力、生きていく力を身に着ける。あえて『講座』としているのは、それぞれ課題解決の目的をもって行っているからです。そうして自然を体感して生きる力を育んだ子どもたちが、20年後大人になったときに田舎に住みたいと思ってくれたら」と話す。

記者も取材中、活動に参加させてもらった。東京暮らし、完全インドア派の記者がターザンロープで斜面を駆け、ぐらぐらした梯子でツリーハウスの頂上に登る。カメラとノートを置き、ごわごわしたロープを掴んだ。足で地面を蹴ると立ちのぼる落ち葉の香り、頬をなぶる山の風。たったこれだけの体験なのにこの達成感。体験とはこういうことか。これは聞くだけでは、見るだけではわからない。四季を通じてしっかり自然を味わい体験した子どもたちが大人になる、その未来はどんなだろうと考えた。

すでに参加者の中から2組の移住者が生まれ、さらに2組が移住を希望しているという。安藤さんは「この講座が街の人から人気なのは、課題をもっている人が多いということでもある。自然って理論じゃわからない、体験してもらわないとね。地道に背伸びせずに継続していきたい」と未来を見据えた。

綾織りのように「地域を守るために一定の人口を保つ」というひとつの目標を編み上げている敷島自治区。住民が一体となって本気で取り組み、確かな成果が出るモデルケースとして、これからも大きな期待が寄せられていくことだろう。

文／二階堂ねこ　写真／高良真秀・嶋香織

▲秘密基地「さくら村」のシンボルのツリーハウス
▼ツリーハウスの頂上からの景色

●おいでん・さんそんセンター　☎0565-62-0610
https://www.oiden-sanson.com

「モトガッコ」（福島県石川町）の室内遊び場

令和2年度
過疎地域自立活性化優良事例

連盟会長賞受賞団体

豊かな暮らしの創出に向けて
（福島県石川町）

町指定文化財である「鈴木重謙屋敷」及び旧石川小学校をリノベーションし整備した「モトガッコ」の2つの拠点を核にして、2つの高校の生徒や地域住民との協働によるまちづくり事業。モトガッコは子どもから大人まで「集い」「遊び」「学ぶ」ことをコンセプトにした複合施設で、1階には図書室、キッチン付きのオープンスペース、赤ちゃん広場・室内遊び場、児童クラブがあり、2階には洋ルーム5室、和室2室のほかに新たに整備した音楽室がある。音楽室はコーラス、楽器演奏、ダンス教室等に幅広く活用されている。まちなかの賑わいや活力を創出すると共に、多世代の交流を通したコミュニティの再生「暮らしたい町」の実現に向けた取り組みが進んでいる。

モトガッコ☎0247(26)2566

スマホの配車アプリで「支えあい交通」
（京都府京丹後市）

京丹後町は6町が合併して誕生、京都府の北部にある観光名所としても人気のある地区だが、公共交通面では不便な集落も多い。NPO法人「気張る！ふるさと丹後町」は平成21年に設立され、地域おこしや交流事業を数々手がけてきたが、小売店等の撤去が続く地区では、自動車の運転ができない高齢者にとって買い物や通院のための交通が課題だった。そのため平成29年より「気張る！ふるさと丹後町」の運営で、公共交通空白地有償運送の制度を利用して、登録した住民がドライバーとしてマイカーで希望者を送迎する「支えあい交通」の運行を実施している。申し込みはスマートホンを活用するため手際がよく、観光客からも人気となっている。

「地域と畑は自分たちで守る」農家ハンター★プロジェクト
（熊本県宇城市）

名産の柑橘類がイノシシの被害にあう機会が多かったことから、宮川将人（花卉栽培）さん、稲葉達也（柑橘栽培）さんが中心になり、農産物を食べに来たイノシシを捕獲するための獣害対策に取り組んできた。現在では100名を超える若手農家がハンターに登録、ICTを導入した効率的な防護と捕獲を実現、ジビエ料理にも取り組むようになった。ジビエ調理施設の設置で、高級肉としての需要が高まり、イノシシをプラスに変える機運が高まっている。グループでは、耕作放棄地の再生利用にも取り組み、農林水産大臣賞等を受賞している。

地域の発見と交流に、美里フットパス
（熊本県美里町）

フットパスとは、ありのままの風景を楽しみながら歩くこと。何時までも元気に、町をもっと発見し、交流を深めることをめざして設立した美里フットパス協会。現在町内15ヵ所にフットパスコースを設け、定期的にイベントを開催している。里山、田園、街中などをぶらぶら歩く「ランプリング」で、ガイドを養成したり、地元野菜をたっぷり使ったフットパス弁当もある。ランプリングのほかに、山野草クッキング、縁側カフェ、野菜の収穫、農業等の体験も実施している。町外からのセルフ歩きも増えており、関係・交流人口の増加とともに、地域の活性化にも効果を上げている。（写真）

美里フットパス協会
FAX0964(53)9662

フットパスコースを歩く参加者たち（熊本県美里町）

国内の世界農業遺産認定地域

世界農業遺産とは、「社会や環境に適応しながら何世代にもわたって継承されてきた、独自性のある伝統的な農林水産業と、そこに育まれてきた文化、ランドケープ及びシースケープ、農業生産多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的地域（農林水産業システム）を、国際連合食料農業機関（FAO）が認定する制度」。国内では、平成23年にトキと共生する新潟県佐渡市と石川県能登の里山里海が認定され、以来9地区が認定されている。本誌では今回、大分県国東半島、徳島県にし阿波地域を取材した。

トキと共生する佐渡の里山（H23）
（新潟県佐渡市）

トキとの共生をめざして、生き物が生息できる環境を整備し、主な餌となるドジョウが棲める水田農法の推進、水田の水を抜く中干期に「江」と呼ばれる深みを作る、休耕地を活用してビオトープを設置する等、一年を通じて生き物が生息できる環境を作っている。環境に配慮して育てた米は「朱鷺と暮らす郷米」としてブランド化され、収

益の一部がトキの保護活動に充てられている。

能登の里山里海（H23）

（石川県能登地域）

日本海に面した急峻な山地に広がる「白米千枚田」をはじめとする棚田や、海の強い潮風から家屋を守るために設置する竹で束ねて囲った「間垣」。「揚げ浜式」という能登特有の製塩法、女性が海に素潜りする「海女漁」や山の保全を兼ねた炭焼き等が認定され、このほかに豊作祈願の「キリコ祭り」「あえのこと」等の例祭も対象になっている。

静岡の茶草場農法（H25）

（静岡県掛川周辺地域）

静岡県の茶栽培地4市1町では「茶草場農法」と呼ばれる独自の伝統農法で栽培している。茶畑の周りに点在する草地からススキ等を刈り取って秋から冬にかけて茶畑に敷くことで、茶樹が良好に育ち美味しいお茶ができると言われている。草地があり茶畑があり手入れをすることで生物も数多く生息する自然環境を形成している。

阿蘇の草原に放牧される牛たち

阿蘇草原の維持と持続的農業（H25）

（熊本県阿蘇地域）

草原は放っておくと森林へ変わっていくため、人が管理し続けることが大切。日本最大級の草原を有する阿蘇地域では、春先には草を焼く「野焼き」を行って、新芽の出た草原に牛や馬を放牧し、季節ごとに草を刈る「栽草」を行っている。これら人が管理することで、養分が少ない火山性土壌が、家畜の放牧や米や野菜作りに適した大地になっている。

クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環（H25）

（大分県国東半島宇佐地域）

降水の少ない国東半島では、灌漑用のため池やクヌギ林を造成し、原木しいたけをはじめとする多様な農業地にしてきた。（本誌22頁紹介）

清流長良川の鮎——里山における人と鮎のつながり（H27）

（岐阜県長良川上中流域）

長良川は漁業者や市民団体が河川の清掃や管理で良好な環境を作り、漁業、農業、林業などの産業が発達している。中でも鮎をメインにした内水漁業が盛んで、鵜飼や伝統的な漁法が数多く継承され、食文化も育まれている。清流が生み育てた美濃和紙や郡上本染等の伝統工芸も遺産に認定されている。

みなべ・田辺の梅システム（H27）

（和歌山県みなべ・田辺地域）

養分の乏しい礫質の斜面を整備・開拓して、高品質な梅産地として発展してきた。山林に自生してきたウバメガシは「紀州備長炭」として活用され、現在は育成に力を入れている。梅の生産ではニホンミツバチに受粉させ栽培する方法が取られ、梅食品も多様化して食の提案が積極的に行われている。

高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム（H27）

（宮崎県高千穂・椎葉山地域）

平地の少ない山間地で、針葉樹による木材生産と広葉樹を活用したしいたけ栽培、和牛や茶葉の栽培などを行ってきた。傾斜地に農業用水を確保するため山腹用水路が総延長500㎞も設置され、棚田での米生産や焼き畑による穀物栽培等が持続されている。

五穀豊穣を祈願する「楽神」が地区ごとに盛んで、国の重要文化材に指定されている。

持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」（H29）

（宮城県大崎地域）

伝統的な稲作地帯だが、東北太平洋側特有の冷たく湿った「やませ」の被害や洪水・渇水にも長年悩まされてきた。このため、取水堤、隧道、用配水トンネル、ため池等を設けると共に、管理運営するために「契約講」を組織化する等して、地域の活性化をはかってきた。人と動植物が共生する屋敷林「居久根（いぐね）」地区として知られる。

わさびの伝統栽培——人とわさびの発祥の歴史（H29）

（静岡県わさび栽培地域）

約400年前の江戸時代初期に、世界で初めてわさび栽培を手がけはじめ、長い歴史の中で多様な栽培技術と品種を生み出してきた。山の斜面に合わせて沢を開墾して栽培する「畳石式」わさび田、山の斜面にカヤ等を入れて栽培する農法などがある。美しい景観と日本の保存食文化、農耕にまつわる伝統行事等が継承されている。

にし阿波の斜頸地農耕システム（H29）

（徳島県にし阿波地域）

四国中央部の山間地で急斜面が多い地域だが、段々畑にせず斜面をそのまま生かした農法で蕎麦等の雑穀や伝統野菜を栽培している。（本誌18頁紹介）

De POLA No.54
［でぽら］2021年
発行日／令和3年3月5日
発　行／全国過疎地域自立促進連盟
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-5-4
加藤ビル3F
☎03-5244-5827 FAX03-5244-5828
http://www.kaso-net.or.jp/
編集／（同）編集工房アド・エー

DePOLA [でぽら] NO.54
令和3年3月5日発行
発行／全国過疎地域自立促進連盟 〒101-0047 東京都千代田区内神田一丁目5番4号 加藤ビル3階 ☎03(5244)5827㈹

[DePOLA] Back Number（近刊号）

No.50
過疎への挑戦
農山漁村50年の歩み

■**あの村は、あの人は**――島根県津和野町日原滝谷、増田市匹見町芋原、阿南町瑞穂　■**出稼ぎを辞めて地場産業を興す**――秋田県湯沢市、大館市比内町の青年たち　■**出稼ぎで町を支えてきた男たちは今**――鹿児島県大崎町、新潟県出雲崎町　■**地域産業確立50年の歩み**――熊本県上天草市、北海道猿払村･共和町、岡山県西粟倉村 他

No.51
人々が集い、新しいこと始める
田舎で起業・夢の実現

■**故郷でベンチャー企業**――アキ工芸社（大分県国東市）、菊池製作所（福島県飯館村他）、㈱サフォーク（北海道士別市）　■**起業して地域を元気に**――シェアビレッジ町村（秋田県五城目町）、漁業生産組合「浜人」（宮城県石巻市）、健一自然農園（奈良県山添村他）、源流どぶろく上代（鳥取県伯耆町）、くめなんガールスファーム（岡山県久米南町）、農業法人賀茂プロジェクト（広島県東広島市）、喜界島特産品（鹿児島県喜界町）他

No.52
住民と移住者が協働して
ふるさとを未来へ

■**U･Iターンして地域を元気に**――NPO法人･地域おこし（新潟県十日町市）、日本上流文化圏研究所（山梨県早川町）、いちまいのおさら（鳥取県三朝町）　■**Iターン女子、地域からの報告**――ペンターン女子（宮城県気仙沼市唐桑町）、みらいのしかけ（福岡県上毛町）　■**ふるさとをリノベーション**――奥大和の里オフィスキャンプ（奈良県吉野村）、あきた森の宅配便（秋田県小坂町）、農業支援センター･お助けマン部隊（宮崎県綾町）、田んぼdeミュージカル（北海道むかわ町）、藤里町社協の自立支援策（秋田県藤里町）

No.53
オンリーワンをめざして
わが地区自慢

■**命育む自然郷**――はたやま夢楽（高知県安芸市畑山）、三良坂フロマージュ（広島県三次市三良坂町）、ジオファーム八幡平/MOVIMAS（岩手県八幡平市）　■**移住して田舎で起業**――住みたい田舎No 1の町（鳥取県岩美町）、ワイナリーが人を呼ぶ（北海道余市町）、波乗りオフィスへようこそ&あわえ（徳島県美波町）　■**知恵を重ねて地域の再生･発展へ**――地域活動支援センターUNEHAUS（新潟県長岡市一之貝）、わきのさわ温泉湯好会（青森県むつ市脇野沢）、百姓七人衆（長野県小谷村）、子育てふれあいグループ自然花（鹿児島県枕崎市）

動画で観る過疎地域　YouTubeで配信!

持続可能な未来へ ふるさと交流活動

new

「でぽら」54号「持続可能な未来へ―耕そう! ふるさとの森と大地」特集の中から、都市や地域住民の交流活動に力を入れている地域を中心に動画を作成しました。ぜひご鑑賞ください。

●都市と農業をつなぐぶどう畑「ぶどうの丘 田畑の楽校」（山梨県山梨市牧丘）
耕作放棄地も引き継いで地域のぶどうを守る活動をしている澤登農園。首都圏から援農ボランティアが年間を通じて作業にやってきて、共に学びあいながら多種･高品質のぶどう栽培に取り組んでいる。

●空き家の活用と自然で魅力発信、移住者を受け入れてよみがえる「しきしま」（愛知県豊田市敷島）
徹底した空き家の活用で移住者を受け入れ、40世帯98人が移住。暖かく迎える住民と、自然の中で暮らす素晴らしさを再発見した移住者たちが協力して数々のイベントや講座を開催する。令和2年度過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣賞を受賞。

●山村に生きる人々の知恵を継承 にし阿波「傾斜地農耕システム」
（徳島県美馬市･三好市･つるぎ町･東みよし町）
標高100～900mの山斜面に200の集落が点在する世界農業遺産に認定された地域。独自の農耕方法と山村ならではの農産物を栽培。地元の女性たちが営む農産加工所、里山を一望する景観と山野菜の魅力にひかれて東京から移住しレストランを営む一家などを紹介する。

企画/全国過疎地域自立促進連盟　制作/(同)編集工房アド･エー、㈱ヤン